
c hose of life

木と蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ch o s e o f l i f e

【Nコード】

N 2 1 7 7 A

【作者名】

木と蜜柑

【あらすじ】

女として生まれてきたことが何かの間違いで、男になりたいと願い続けてきた溝内理沙が、部活帰りに古本屋さんで、ある古い本を手に入れる。その本は、不思議な力を持っているという。その摩訶不思議な力である朝突然男になってしまった。そうして男としての人生を歩み始めた理沙の、人間関係や恋愛模様。

プロローグ（前書き）

人生にしっくりしていない人や、人生に悩んでいる人にぜひ読んで頂きたいお話です。つたない文章ですが、皆さんに何か伝わるものがあれば嬉しい限りです。

プロローグ

ここまで生ききて、近頃私はよく思う。

・・・もし、私が男だったなら、私が生まれた7月11日に男という性別で母親の胎内から生まれ出ていたなら、私の人生はいったいどんな風になっていたんだろう・・・？

正直、今の私の生活と言うか、自分自身はあまり好きになれない。なんだかいまいちピンとこないのだ。どっちかって言うと、骨格は父親に似てゴツゴツしているし、体も女としては大きい。顔も手も大きくて、はつきり言って自分に女としての自身なんかあるはずもない。もてたことなんか全くもってない！ただ、鏡を見ていていつも思うのは、これが男ならな・・・ってことだけ。たぶん他のどの女の子よりもずっとずっとその気持ちが大きいことは確かだ。私が母親の胎内に誕生するよりももっと前に、もし神様がこの私、溝内理沙になる前の前の私に、男の道を行くか女の道を行くかの選択をするチャンスをもう一度だけくれたなら、迷うことなく“男”の道を選ぶことだろう。

そんなある日、私は古い本屋で一冊の不思議な本と出会うことになる。

不思議な本

その日、部活が早く終わったので、私は帰りにずっと入ってみた
いと思つていた小さな古い本屋に寄つてみることにした。ドアの曇
った窓から中を覗いてみると、中は薄暗く、古ぼけた本がぎっしり
と本棚に並んでいる。もともと映画好きの私は、前に見たネバーエ
ンディングストーリーのような不思議な本に出会えるのではないかと、
密かに心の中で期待を膨らませていた。部活を終えてすっかり
遅くなつたいつもなら、店の中の灯りも消えて閉店してしまつてい
るのだが、今日はまだ店を開いているようだ。ドアを思い切って引
いてみると、ついていた小さな鐘が「カランカラン」と懐かしいよ
うな音を立てた。

「いらつしやい。」

店の奥からは予想とはえらく違った、太ったやさしそうなおばあさ
んが出てきた。もっと難しそうな顔をした、頑固なおじさんが出て
くるのではないかと内心ビクビクしていたのだ。私はとりあえず軽
くお辞儀をして、店の中をじっくりと見て回った。中は外から見ただ
ほど狭くなくて、古いには古いのだが床下や棚もきれいに掃除して
あった。どれもこれも古くて分厚い本ばかりで、難しそうなものば
かりだ。

「何かお探し？」

店のおばあさんは親切に私に聞いてくれる。

「いえ、得に探してる本っていうのはないんですけど、何かおも
しろそうなのがあつたらな

ゝって……。何かお勧めの本とかつてありますか？」

私がそう訪ねると、おばあさんは目を右や左にちらちら動かして、
何か考えている様子だ。

「あなたのような若い学生さんがおもしろいと思う本……。そう
だねえ……。」

おばあさんはあつと思ひ出したような顔をして、クルつと方向転換すると、本棚の右下の墨の「あつたあつた、この本よ。」

おばあさんはよつこらしよと立ち上がると、一冊の紙を束ねて作つたような、すっかり表紙のはげた分厚い本を私に微笑みながら見せた。

「この本はね、アタシがずっと若かつた頃に、おばあさんにいただいた本なのよ。」

おばあさんは懐かしそうにその本の表紙を指でなぞつた。

「とっても不思議な本なのよ。読んだ人に道を示してくれる、本当にステキな本。」

おばあさんはその本を私にそつと手渡した。

「えつ、そんな大事な本売り物にしちゃっていいんですか？」

私は慌てておばあさんにその本を変えそうとした。もちろん、不思議な本だつてことに興味がなくはなかつたが。

「ふふふ、いいのいいの！もつというんな人にその本を読んでもらいたい。あなたのような学生さんは、きつと悩みもたくさんあるでしょ？その本はきつとあなたの役に立つはずよ。」

おばあさんは私から本を受け取ろうとはせず、後ろで手を結んでしまった。

「いいんですか、ホントに？」

おばあさんはこつくりとうなずいた。そして近くにあつた丸椅子を引つ張り寄せると、ころころした身体でよっこいせとそこに腰を下ろした。私がその本をじつと見つめていると、おばあさんは静かに話し始めた。

おばあさんは昔、この本をもらつてすぐに夢中で読んだそうだと、当時、初恋をして、誰にもそのことを相談できずに悩んでいたおばあさんを、とにかく惹き付けるだけの魅力がそこにはあつたのだと言つ。

「本当にこの本にはずいぶん助けられたよ。」

アタシの欲しかった答えが、全部そこに書かれていてねえ……

。　
私は急にその表紙がはげて茶色くなった本が、あたたかいような気持しがした。

「この本、大切にします・・・！」

おいくらですか？」

鞆から財布を取り出そうとすると、おばあさんは慌ててその手をそつと添えた。

「いいえ、お代は結構よ。そう言っていただけで十分です。

」　
おばあさんは優しく微笑むと、そのまま私を店の外に送り出してくれた。

「また来ます。」

そう言つて店を出た私は、なんだか心配になった。本当にこんな大切な本をただでもらつてもよかったのかと。

その夜、私はさつそくその本を読んでみた。表紙を一枚めくるとそこには題名も何も書かれておらず、目次さえもない。いきなりそこからぎつしりと細かい手書きの文で始まっているのだ。そこで確かに不思議な本だと私は感じた。ゆつくりと読み進めていくと、だんだんこの本がどんな内容かがわかってきた。どうやらこれは、古い中国の一人の青年の話しを誰かが日本語訳した物のようだ。出てくる人物はすべて中国の人の名前になっている。この本自体よりも、書かれている内容の方がずっと古いということがわかった。その内容は、青年が生まれてからの成長を描くものであった。今の私からすれば、この訳された日本語さえも読むのが困難であったが、不思議にも苦になることなくどんどん読み進むことができた。そのうち夜も更け、知らぬ間に私は眠ってしまった。

夢

その夜、私は不思議な夢を見た。

昼間おばあさんに印象的な話を聞かされていたせいか、眠るギリギリ前までこの本に没頭していたせいだかわからないが、この本の主人公の青年が突如現れたのだ。これまた不思議なことに、夢の中だというのに私は思ったことを思い通りに話すことができ、昼間のことや本の内容も全てが思い出せた。

「君は僕が思った通り、本当に心の優しい人だね。」

夢の中に出てきた青年は私に話しかけた。

「でも、君はとても大きな後悔をしているね？」

私は頷いた。

「今まで僕が見てきた人達は、みんなこの本を読んだ後は悩みも消えてとても元気になってくれた。」

青年はし図かに歩み寄ってきた。

「でも君は・・・生まれてくる以前に根本的な間違いをしてしまったと悩んでる・・・。」

私の中で衝撃が走った。

「どうしてそれを・・・？」

青年は切れ長のすつとした目でじつと私を見つめた。まるで、全てを見透かしているかのように。

「僕が読む人に直接接触するのはこれが初めてだ。びっくりしたかい？」

青年は悪戯っぽい顔でおどけて見せた。

「うん、ちよつとね。」

私に余裕があることを確かめた青年は、突然話を切り出した。

「君にぜひもう一度だけ機会をあげたい。もし君が望むなら、その・

・僕はその願いを叶えて あげることができる。」

青年は手の平から金の小さな粒を出した。

「機会つて？」

機会とはもしかして、男として人生をやり直すことなのだろうか。もしそうだとしても、これはどうせ夢なんだ、もらえる物はもらっておいて損はないか！目が覚めたら現実の世界に嫌でも引き戻されることになるんだから。

つという心の声に後押しされて、私はとうとう言ってしまった。

「お願い！もう一度だけチャンスをちょうだい！」

青年は手の平の上の金の粒を指差した。

「これを食べて。」

私はその粒を受け取ると、いっぺんに口の中に放り込んだ。そしてごっくんと飲み込んでしまった。

ある日俺は男だった

目が覚めた。

首を寝違えたらしい、ひどく痛い。

序々にはつきりしていく意識の中で、自らの部屋の異変に気付く。何だか他人の部屋に入ったような感覚を覚えた。起き上がった部屋をよく見回してみると、部屋そのものは同じだが、置いている物や配置が全然違う。一体どういうことなのか？落ち着いて何が起こったのかをじっくり考えてみるが、心当たりは全くない。頭に手をやって初めて気がついた。

髪が短い……！

昨日まで確かに肩まであった髪がすっかり短いのだ。びっくりしてベッドから飛び起きた瞬間、自分の足が目に入った。

大きい……。

以前にもまして大きくゴツゴツしている！よく見れば手も大きい！慌てて会談を駆け駆け下り、洗面台の鏡を覗き込んで、思わず声を上げてしまった。

「うわあっ！」

そこには、女ではなく、男の姿が映っている。いったい何が起こったのか……。驚いた顔のその男は、まじまじと自分を見つめている。その顔は、どこことなく溝内理沙の面影を残した、まさかの自分だった。相変わらず色白だが、がっちりとした骨組みに、今まで気にしてきた奥二重も、全て男らしく見える。属に言う“二枚目”というやつだ。

放心状態になり。その場にしゃがみ込んでしばらく考え込んでいると、昨日の夢をふと思い出した。まさか……、そんな。夢が現実になるはずなんてない……。そうだ、まだきつと夢の途中に違いない！ありえない！

「お兄ちゃん、な、何してんの……？」

後ろでふと声がした。妹の真希が起きてきたのだ。バツと振り向くと、そこには昨日と変わらない真希がいる。でも、なぜ真希は変わっていないのだろう……。どうか、自分の性別だけがそっくり入れ替わってしまったのか。フラフラと立ち上がると、真希の隣を通り抜けて、とりあえずそのままトイレへと向かった。こんな時でも自然の欲求には逆らえない。真希は変な顔をして後ろから声をかけた。

「貧血なの・・・？」

その後、トイレで大変な事件が起こる。いったい何がどうなったか、だいたい予想がつくだろう。そう、生まれて初めて父親以外のアレを見るはめになるのだ。つといても自分のであるのだが。

おかげでトイレを済ませて朝食を食べに机に着くまで、約十分近くもかかった……。トイレの事件で、これが本当に自分の身体なのか？つという不安感がいつぱんに沸いてきたのと、この先ある未来についつい喜びの笑みを漏らしてしますような両方の妙な感覚で、新しい自分の生活を期待する気持ちが膨らむばかりだった。

もちろん妹の真希や両親が変に思ったのは言うまでもないが。

学校生活初日

慣れない男子の制服に違和感を持ちながら、2―B、その教室におそるおそる入ってみた。

いつもより早かったせいも、まだ誰もいないようだ。席は・・・と女の自分が座っていた机の中を探って、置勉強していた歴史の本を引っ張り出してみると、確かにそこには“溝内”とはつきり書かれている。その字は、角ばったでかい字で、紛れもなく自分の字だった。

でもまさか、今の自分が昨日までの理沙という名前だなんてありえない。きっと他の名前があるはずだ。

ため息をついて、締め切った窓を丁寧にひとつずつ開けていくと、一番端の窓から外をぼんやり眺めた。この世界は何も変わりはない・・・。ただ、自分の存在だけが最初から男だという設定になってしまっているだけで、いつもの町の風景、いつもの教室、そのままだ。

「ガラガラガラ」

ドアの開く音がした。誰か入ってきたようだ。

振り向くと、昨日まで一緒に弁当を食べたり、テレビのたわいもない話をしたりした河上美穂だった。

「おはよう。」

おもわずいつものように話しかけてしまってから、直後にハツとした。美穂が真っ赤になっている。しまった、自分は男だった・・・！

「お・・・おはよ・・・。」

なるべく目を合わさないようにしながら、美穂は自分の席に荷物を置くと、逃げるように教室を出ていってしまった。

「そっか・・・、男だったんだ・・・。」

そのことに驚きながら、しばらく呆然と突っ立っていた。そしてた

め息ばかりついてしまう。誰か、本当に助けて欲しい。自分はいったい誰なのか？どんな人間なのか？

「コーキ！おつす。」

開いたドアからひよっこり現れたのは見覚えのある顔だった。

「なーにやってんのー？こんなとこで一人で。」

そうだ、こいつは同じクラスの北野哲平、いつも騒がしいそのヤツだ。でも、結構子供っぽい性格とその童顔さが女子に受けて、モテているその一人である。

「え、あ、ちよつと早く来すぎて・・・。」

「・・・？なんか今日のコーキおかしくない？」

哲平は顔をしかめる。そうか、俺はコイツと仲がいいのか！っと納得しつつ、「コーキ」という言葉が妙に気になった。コーキ・・・ひよつとして俺の名前？

「お前こそなんで今日こんなに早いんだよ？」

極力顔色を変えないように努力してみるが、きつとボロが出ていることだろう。

「な〜に言っただよ。昨日、オレが顧問に怒鳴られて、『お前は一週間便所掃除だ！』って言われたの見てただろ？」

哲平は重そうなスポーツバッグをどしつと床に置くと、近くの机の上にはひよいつと座った。

「あ、そういやそうだったかな・・・？」

いやいや、まったくそんなこと知らないって。

とにかくここはいつも通りのように平然と接するしかない。

「大丈夫？ホントなんか変だよ？」

哲平は心配そうに顔を覗き込む。な、なんとかしなければ！とっさにそう思った。

「じ、実はだな、その・・・。」

これ以上妙に思われないようにするにはどうすべきか。つたと冷や汗が流れ落ちたような気がした。

「実は？」

「実は・・・、今朝起きたらいろんなことが思い出せなくてさ・・・。」
これはあまりに嘘っぱちすぎてボツだなと思いながらも、ため息をつきかけたその時、

「え！属に言う、あの“記憶喪失”ってやつ？」

なぜか哲平は目をキラキラ輝かせて身を乗り出して聞いてくる。

「どっか頭打ったとか？何も覚えてないの？」

そうだ。こいつは好奇心の塊だと、学校でも有名だったのだった。

「いや、どこかで打った覚えはないんだけど、自分の名前も忘れちゃってさ・・・。」

哲平も驚きを隠せないようだ。

「ま、まじで？」

じゃ、じゃあオレの名前とかも覚えてないわけ？」

正直、ここまでこんな話を信じてくれると思ってもみなかったものだから、少し嬉しかったりもした。

「北野哲平、好奇心の塊。とにかく落ち着きがない。」

「はへ？覚えてるじゃん。なんで？」

哲平はたたと黒板に走り寄ると、すっきり

ちっこくなつた白チョークを手にとって、何やら書き始めた。

「溝内航紀・・・？」

これが俺の名前・・・。コーキっていうのは航紀という字だったのか。

「これはコーキの名前！あと何が思い出せないの？」

哲平はチョークをひとまず置くと、手についた粉をぱんぱんと払い落とした。

「他にも色々だよ。」

そうこうするうちに、他の生徒が登校してきたようだ。廊下がガヤガヤを騒がしくなり始めている。哲平はさつと黒板の字を消すと、今度は急に真剣な顔で言った。

「コーキさあ、それってやつぱ病院行って診てもらわなきゃだよ。オレはそう思う。」

きつと哲平とオレは本当に仲がいいんだなあと、第三者の目で見て
いる自分自身が、とても変な感じた。

「いっぺんさあ、リ्यूチにも相談してみようぜ。それから病院行
こう、オレもついてってやるから。」

「リユ、リ्यूチ・・・？」

哲平はまさかという顔をした。

「リ्यूチも忘れちゃったのかよ！？」

もう一度よく考え直してみるが、リ्यूチなんて名前のやつなんか
思い出せない。

「ホント大丈夫・・・？重家龍一だよ、覚えてないの？」

重家・・・。まさか、あの重家龍一と俺が友達だったとは！そいつ
は、昨日までの自分が密かに思いを寄せていた、そのまさかの人物
だった。思わずクラクラして頭を抱え込んだ。

「コーキ！どうしたの？」

昨日まですれ違ったびに顔を真つ赤にしていた、あの重家龍一が、
今日の自分では友達だって！？考えが全くついていかない。ついて
いくはずがない！

「ちよつと、保健室で休んでた方がいいよ。ホラ、立てる？」

別段どこも体調は悪くはなかったのだが、考え込んでいる姿が、哲
平にはよほど具合が悪く見えたらしい。あまりに心配するものだか
ら、とうとう俺は一日を保健室のベッドの上で過ごすハメになった。
重家龍一こと、リ्यूチが姿を現したのは、五間目の休み時間のこ
とであつた。相変わらず、例の“大寝坊”というやつだそうだ。

不思議なものだ。俺自身が男だと自覚したと途端、どういふ訳かは
わからないが、リ्यूチに思いを寄せていた昨日までの自分が嘘の
ようだ。心底いい友達だなんて思ってしまう自分がそこにいた。そ
して、ふとあることに気がついた。俺も女の子に興味があつたりす
るのだろうか、つという何気ない疑問だった。その考えは、この後
哲平とリ्यूチに脳神経外科に連行されるそのときまで続くことにな
る。

記憶喪失

「しつかあしまあ、あれだね、びっくりしたよホント。記憶喪失だったなんて。」

哲平が廊下の開け放した窓に寄りかかりながら言った。

「ストレス性の一時的なものって言ってたけど、航紀、お前なんか悩みでもあんのか？」

リユーチは冷たい床に腰を降ろした。

「別に自分でじゃそうは思わないんだけどなあ・・・。」

そう言いつつ、内心では、覚えてないつつつか、最初っから知らないんだからしょうがないだろ。なんて思っていた。

「もしなんか悩みとかあるんだったら、オレたち相談乗るし、なんでも言えよな！」

哲平に軽く頭を小突かれる。

「なあ、思うんだが、航紀のストレスになってるんで、もしかしてアレじゃねえの？」

そう言つてリユーチが指したその先には、見覚えのある女子達。それは、山崎実咲率いるその女子グループだ。

「そ、そうかもね。」

哲平は苦笑いをして窓の方に向き直った。何だ？あのグループが俺のストレスになってるって？それはいったいどういうことなのか。確かに、女のとときも、あのグループはどうも好きになれなかった。つとは言っても、関わる機会など一度もなかったのだが。

「コーキくん！」

どうやら実咲の方もこちらに気付いたようだ。しかしなんで俺の名前・・・？リユーチと哲平を見ると、なんか急によそよしい態度で無口になる。哲平なんか、外に向かつて何の曲かもわからないような曲を口笛で吹き始める始末だ。

「聞いたよ、昨日気分が悪くなって保健室にいたんだって？大丈夫

なの？」

えらく心配した様子で話しかけてきた。

「あ、うん。ただの風邪だから大したことないと思う。」

どという態度をとっていいものかよくわからずに、リユーチの方を見るが、リユーチはそっぽを向いたまま目を合わせようとしなない。

「ホントにー？無理しちゃダメだよ？」

山崎実咲って、こんな性格だったわけ。そんなことを考えながらも適当に話を合わせておいた。実咲が去った後、哲平がまたくるりと体をこちらに向けてふうとため息をついた。

「オレ、な～んか山崎さんって苦手なんだよね。」

リユーチも頷く。

「俺もああいう女うざいよ。航紀も苦勞するのな。」

いやいや、状況がいまいちよく飲み込めない。

「へ？」

俺がわかっていない顔を見ると、リユーチは呆れたように言った。

「お前、アイツのこと無意識に忘れようとするが為に記憶喪失になったんじゃない？」

くくくつと哲平が傍らで笑う。

「コーキ、現実逃避はだめだよ。山崎さんに猛アタックされてるっていう現実は、忘れようが変わらない。ははは。」

リユーチが哲平の足をバシッと叩いた。

「哲平、お前はちよつと黙ってる。」

「へい。」

な、なんと、俺があこの山崎実咲に好かれているなんて、全く信じられない。あの子と言えば、女子の間では性格が悪いと相当評判だったが、男子の間ではあの大きな目と小作りの顔が可愛いと評判でもあった。とにかく、いい意味と悪い意味も含めて校内でも知られている女の子なのだ。そんな子に自分が好かれているなんて、女のことのことを思うと考えられないことだった。活発ではあったが、別段目立つ訳でもなく、その他大勢の中に埋もれるその一人だったの

だ。だから、これが驚かずにいられようか！

「さつきさ、お前山崎に風邪だつつたけど、はつきり『お前のせいで記憶喪失になった』って言うてやればよかったのに。」

リユーチは立ち上がりながら言った。前はもつと高いと思っていたリユーチの身長は、今の自分から見ると、目線も少ししかかわらない。

ほんのちよつとリユーチの方が高い程度だ。

「いやいや、まだ山崎さんが原因と決った訳じゃ・・。」

リユーチが歩き始めたので、俺と哲平も歩き始めた。

「まあ、確かにね。山崎さん以外にもコーキには色々障害があるわけだし？」

色々？他にどんな障害があるのだろうか？このとき、まだ自分自身でもどんな障害があるかなんて全く予想もつかなかった。

メールにて

その晩、夕飯を済ませた後、初めて自分の携帯の存在に気付いた。今まで携帯を忘れることなんてなかったのだが、この二日間いるんなことがいつぺんにありすぎて、そこまで頭が回らなかったのだ。

机の上を見てみると、充電スタンドの上におとといのまんまきつちりと置いてある。手に取ってみると、確かに以前持っていた物と全く同じだった。傷の痕さえも・・・。

おそろおそろ開いてみると、メールが何通か溜まっているようだ。それも仕方のないことだ。二日間も放置しておけば、そりゃあメールだって溜まる。

しかし、俺はすぐにはメールを開かずに、先にメモリーを開いてみた。いったいどんな友達がいるのかと、とても気になったのだ。ア行から順にゆつくりと登録されている名前に目を通してゆく。まるで聞いたことのない名前がいっぱいだ。

もちろんリユーチ、哲平の名前もしっかり入っていたが、妙に引っ掛かることが一つある。男子の名前交じって、女子の名前も多数入っているのだ。俺ってもしかしてタラシ!? そう疑いたくもなる。こつも多く入っていると、そういう考えがどうしても頭から離れなくなってしまうのだ。そして、ヤ行まで行き着くと、俺は思わず手を止めた。

なんと、山崎実咲の名前までもが、きつちりと登録されていたのだ。ますます今の自分がわからなくなる……。呆然としながら、二日間のメールを見ようとすると、六通も溜まっていつことに気が付いた。一通はリユーチかただった。どうやらおとといの夜に送信してきたらしい。

“明日遅刻すつからヨロシク”

つとまあシンプルな内容のメールだった。もう一通は哲平からだ。

“あしたの昼飯は食堂にしよう”

三通目は隣のクラスの小田というヤツからで、

“借りた数学のノート、もう一日だけ借りてでもいい？”

つてことはおい、今日持つて来なかったな、このヤロー！あとの三通は全部あの実咲から来たものだった。これには驚いた。まさか、自分のメールアドレスを知っていたなんて・・・。

“コーキくん今何やってるの？”

つというメールから始まり、

“ごめんね、寝てたら。実咲ちよつと眠れなくてさ＊”

“ねえねえ、コーキくん来週の日曜日空いてる？もし空いてたら一緒に遊ばない？哲平くんと 重家くんも大歓迎だよ こっちは今のとこ女子三人なんだ」返事はいつでもいいよ！おやす みなさい”

つという内容で終わった。日付は昨日だ。今日の日付のメールは一通もない。しかし、実咲がどんなに積極的な子かがよくわかった。以前の自分にこんな度胸があっただろうか・・・。慌てて今までの受信箱のメールを調べてみると、度々実咲からメールが来ている。それに対して自分がどんな返信をしているのかと読んでみる。

“コーキくんは今好きな子とかっているの？”

“今んとこいないかな”

いやはや、以外にきっちり返信しているものだ。

“じゃあ、まだ実咲にもチャンスはあるってことだよね！”

“山崎さんってももしろいね〜（笑）”

なかなか俺も巧く返しているとは思ってたが。まあとにかく、これを読んでわかるように、実咲の方は確実に自分に好意を抱いている。でも、俺自身はうまく誤魔化して、そのことに触れないようにしていたようだ。俺も哲平たちが言うように、どうも実咲が苦手なのだ。今度の誘いに応じるということは、実咲の猛アタックに応えるということになる。ここはぜひ断っておきたい。

“日曜のことなんだけど、予定がもう入ってるから、せつかくだけごめんね”

っという文を打ち終わった後に、ついつい相手を気遣って、“またの機会に”と付け加えてしまう自分が結構虚しい。やっぱり以前の女の自分から見た目は変わっても、性格はそのまんまだ。どうやっても相手の気持ちを考えて、言いたいことが半分しか言えないところ、相変わらずである。本当に、ここだけは治しようがないものなのか。

髪を染めた日

「まじでー！？ホントに山崎さんに日曜誘われたの??」

ブランコで立ち漕ぎしながら哲平は叫んだ。

「哲平！声がでかいっ。」

いつ何時実咲が、またはその友達がこの話を聞いているかわからないっていうのに、哲平はお構いなしだ。

「モチ断つたんだろ？」

近くのベンチで足を組んで座っているリューチは、胸のポケットからお洒落なライターと煙草を取り出した。

「まあ断ったことは断ったけど。」

哲平の乗っているブランコは、どんどんスピードを増して、ますます声がでかくなる。

「でもさあ、コーキ、山崎さんと同じクラスじゃなくてよかったねー。クラスメートだったら きっともつと付きまとわれてるよ!」

考えてみればそれもそうだ。実咲と同じクラスだったとしたら、ノイローゼになっていてもおかしくない。哲平はとうとうほとんど地面と平行になるまで勢いをつけた。

「そっぴいや航紀、お前等分部活どうすんだ？」

リューチは煙草を吹かしながら言った。そういえば、俺は何部に所属しているんだっけ？

「ほつとんどさぼって来てないリューチが言う言葉なの？」

序々に速度を落としながら哲平は嘖き出した。

「さぼってるって人聞きわりーな、掛け持ちしてる水泳部の練習にまわってるっつってるだろ。」

リューチはフウと鼻から白い煙を出した。

「それは表向きの言い訳だろ? だってさ、水泳部って冬の間は筋トレしかないじゃん。しかも自由参加だし。」

聞いたことはある。リューチはバスケット部と水泳部を掛け持ちしてい

て、どっちも本気でやればいい線いくらしいのだが、この男、極度の面倒くさがりでさぼってばかりいるのだと、顧問の先生達が愚痴をこぼしていた。

「コーキ、今はやっぱ休みとった方がいいとオレは思うなあ。」

ぴょんつと哲平はブランコから飛び降りた。哲平はバスケの推薦でこの高校に入ったと言う、バリバリのスポーツ少年である。そういうことは、俺もバスケ部？女の時もやはりバスケ部に所属していた。

「そうだよなあ・・・。」

今のこの新しい暮らしに慣れていないせいか、自分の家の中でさえ、妹や両親にまで気をつかっている状態だ。三日目にして、すでに精神的にも身体的にも、序々に疲れが出てきている。朝から調子がよくないのも、きつとそのせいだ。休部届けを出す、それもいいかもしれない。今のまま無断欠席をし続けるよりはよっぽどマシだ。

「明日、休部届け出すことにするよ。」

それを聞いて安心したらしく、哲平は二力つと笑った。

「じゃ、オレそろそろ練習戻るね！」

哲平はわざわざ部活を抜けて、ジャージ姿のまま俺達に付き合ってくれていたのだ。

「ああ。頑張れよ。」

哲平は、駆け足で行ってしまった。そして公園には、オレとリユーチだけが二人残された。急に辺りが静かになったような気がした。哲平一人いるだけで、どんなにその場の雰囲気が変わるのがよくわかる。

「お前さ、あの山・・・なんとかつつう女のこと、どう思ってたんの？」リユーチはいきなり切り出した。あまりにも急でびっくりした。

「正直、あんまり関わりたくないって思ってる。」

俺はしゃがみこんで砂を手に乗せたりしながら言った。

「俺も同感。」

すっかり短くなった煙草を地面に落とすと、ジュツと靴のかかとで

踏み潰した。

「それよかよ、お前当分部活行かねんだったら、今から俺に付き合え。」

足元で砂まみれになっているリュックを拾い上げ、パンパンと払い落としながらリユーチが言った。

「ん？なにに？」

結局この後、俺はリユーチに無理矢理付き合わされ、美容院で八千円も使って髪を染めるハメになった。リユーチは前染めた分がほとんど元に戻ってしまったので、そろそろ染め直そうと思っていたのだそう。そして以前と同じように、ツンツン逆立った髪を再び真紅に染めたという訳だ。そして俺は……。すっかり栗色になってしまった髪をグシャグシャとかき乱した。

「いい色出てんじゃない。」

リユーチはこう言うが、自分ではそうは思わない。生まれつき白い肌の色と、このリユーチ推薦の髪の色で、どう見ても色素が薄いだけのように見える。それと同時に、なんだか自分の存在まで薄くなってしまうような気がして、どうも納得いかないのだ。

「よくないって。ますます存在が薄くなっちまうよ。」

俺がブチブチ言っているのを聞いて、リユーチは変な顔をする。

「何言ってるんだ、目立ちすぎつつう位目立ってるじゃねーか。」

リユーチが言う意味が分からずに、俺も変な顔をした。

その後、俺達は無言だったが、不思議にもそれが自然だった。

俺とリユーチの仲も相当のものようだ。リユーチと別れて役5分程の所に自宅があった。門の前には何台か、見慣れない自転車が止まっている。どうやら妹の真希が友達を呼んでいるらしい。うちに入ると、上の階から笑い声がする。その声を聞いて、妙に懐かしくなった。

女の頃、自分もああやって友達とキャツキャと騒いだりしていたことを思い出したのだ。もう二度と美穂たちと騒ぐこともないだろう

と思うと、なんだか寂しい気持ちになった。

そんなことを考えていると、ドタドタとすごい勢いで階段を駆け下りてくる音がする。俺が荷物を床に降ろすと、ひよっこり真希と二人の女の子が顔を出した。

「お兄ちゃんおかえり！」

そして瞬間驚いた顔をした。

「髪切ったの！？ってか染めたの！？」

あとの女の子達もじっとこっちを見つめている。

「あ、ああ。友達の付き合いで。でも、色が気に入らないんだよ。」
そう言つて苦笑いしたところ、

「そんなことないです！めっちゃ似合ってます！」

真希の友達の髪を一つに束ねた子が言つた。

「うんうん、色もすごいいいよね！」

もう一人のちよつとぽつちやりした感じの子も言つた。真希もうんうんと頷いている。

「そっかあ？」

襟元を緩めながらリビングに入ろうとすると、後ろで何かコソコソ話し始めた。でもまあガキの言うことだ、そう思いながら気にも留めず、俺はソファーにどっしりと座り込んで、テレビのリモコンを手にとつた。

「ちよつとお！真希のお兄ちゃん、マジでやばいよつ、ホントかっこいい！」

「ここまでかっこいいなんて思つてなかったよねー、アタシ一瞬で惚れちゃった！」

真希はニヤニヤと笑いながら自慢げに話す。

「でしょでしょ！？でも惚れるのはまだ早いよー？お兄ちゃんの友達が、こりやまたかっこいいんだな、これが！」
すっかり友達の方は興奮してしまっている。

「うつそ！いいな、真希の幸せ者！アタシ達も見たいよね？」
真希はブイサインを出した。

「いいよ！今度お兄ちゃんの友達がうちに遊びに来たときに見においで。」

すぐ後ろで、妹とその友達がこんな話で盛り上がっていることに全く気付くことなく、俺はテレビでロンブーの再放送を見ていた

席替え

学校に着いて一番最初に、俺は顧問に休部届けを出しに行った。

髪を染めてしまったので、仕方なく黒のニット帽を深くかぶって誤魔化した。

「航紀、哲平から聞いたぞ。お前、ストレス性の一時的記憶喪失なんだって？」

この身長190程あるうかという顧問、浅賀はいつになく小さな声で言った。

「はあ、それでしばらく休養を取りたいんで、届けを出しに来ました。」

俺が休部届けを出すと、浅賀は心配そうな顔でそれを受け取った、

「そうだな、それが一番いいだろう。また体調が戻ったら来なさい。すぐに取り消してやるから。」

浅賀と話したのはこれが初めてだったが、思っていたよりも優しくてホッとした。もっと怒鳴られたり、どつかれたりするのではないかと、内心ビクビクしていたのだ。

「それにしても、お前ちゃんと俺のことは思えてるのか・・・？」

浅賀が一番聞きたかったのは、どうやらその部分らしい。

「覚えてますよ。」

可哀想なので、覚えているということにしといてやった。弱冠嬉しそうに頷く浅賀が妙におもしろくて、ついつい噴き出しそうになった。

職員室から2―Bの教室までの途中で、不運にも5人程の女子を引き連れた実咲にばったり会ってしまった。

「コーキくん、おはよう！」

あゝ・・・しまった。捕まってしまった・・・。そう思いながらも、早く話を終わらせようとわざと笑みを作る。

「おつす。」

やはり実咲はどうも苦手だ。

「昨日メール送ったんだけど、見てくれた？」

えっ、メール！？慌ててポケットから携帯を取り出して確認してみると、確かにメールがきている。

「あっ、ごめん。全然見てなかった。」

やってしまった……。これで話が長引いたら嫌だなあ。

「やっぱり！返事が来ないから、きつと見てないだらなって実咲思ってたんだ。」

実咲はにっこり笑いながら言った。どうやら怒ってはいらしい。

「じゃあついだから今言うね。日曜の件なんだけど、気にしないでいいよ！予定は入ってたんなら仕方ないもんね。また別の日に遊ぼう。」

予想が的中、絶対この話題だろうと思っていたのだ。

「お、おう。」

は、話はとりあえず終わり……？

「また近いうちに誘うね！」

あゝ、やっぱりどっちみち誘われるのか。実咲は手を振りながら、そのまま行ってしまったが、俺は誘われときのことを今から考えて、会ったときよりもがっかりしていた。ホント言っと、“またの機会に”なんて書かなけりゃよかったと心底後悔している。

「ん？コーク、またなんかあったの？」

哲平はおはようよりも先にそう言った。

「あー、相変わらず山崎さんのことだよ。」

机の上でへたばっている、哲平は俺の髪をいじくり始めた。

「いい色じゃん。」

「そか？」

リユーチはまた遅刻なのだろうか、もうすぐチャイムが鳴るというのに、来る気配すらない。留年する気なのか……？

「そう言えばさ、今日の6限目のホームルーム、席替えだったよな。」

哲平はため息をついた。

「そうだっけ？何、お前イヤなん？」

哲平は口を尖がらせる。

「だって、今の席寝放題なんだもんよー。あの席から動きたくないよ。」

哲平の席は教室の窓際の隅の一番後ろの席だ。あそこは視覚になつて確かに教卓からは見えにくい場所だ。

「哲平、お前なあ・・・。」

俺もできたら今日の席替えで今の哲平の席に行きたいものだ。っては言っても、くじ引きだから40分の1の確立となるのだが。

そうこうするうちにとうとう6限目がやってきた。リ्यूチは昼休みにどうとうと登校してきて、今はきっちり自分の席に着いている。

「今からくじ引きの箱を回しますので、端の人から順に引いていくてください。」

代議員が箱を回すと、次々とくじが引かれ、教室中が誰がどこの席だとかなんとかと、すっかり騒がしくなった。

「コーキ、どこの席だった!？」

哲平は俺が引いたのを見てすぐにすつとんできた。

「まだ見てないってば。」

俺が折れたんだ紙を開くと、そこには赤い文字で大きく“31”という数字が書かれていた。あの寝放題の特別席は“6”だったのだ、かすりもしなかった。

「うわ、かなり遠いよ。オレ“10”だもん。」

こういうときは決まって遠くが当たるものなのだ。

「リ्यूチ、どうだった??」

哲平は今度はすばやくリ्यूチの持っていた紙をひったくって開い

た。

「“1”！驚きつ。」

1が出たリ्यूチには悪いが、ちょっと可哀想だと思ってしまった。
“1”なんか出た日にゃあ、寝るところかウトウトすることさえできない。それにあそこは黒板が反射して、字がやたらと見えにくいのだ。

「哲平、お前俺に喧嘩売ってんのか。」

リ्यूチは軽く哲平の足を蹴飛ばした。

「まあ、みんなバラバラだつつつうことだな。」

巧く話をまとめてしまうリ्यूチは、ある意味すごい。

「そろそろ全員にくじが回ったようなので、静かに席を移動してください。」

代議員がそういい終わらないうちに、ガタガタとみんなが動き始めた。俺の席は、教室の右から2列目の、後ろから2番目だ。机の横に掛けていたリュックを取って、そこへと移動する。リュックを新しい席の机にどかと降ろすと、自分もさっさと腰を降ろした。みんな周りが誰だとか、席が近いとか遠いとかで盛り上がっているが、俺はそんなことは結構どうでもよかった。

机に肘をついて、ぼうつとしていると、ふっと目の前を美穂が鞆を抱えながら通過した。

あの子はどの席になったのだろうか。

なんとなく目で追うと、なんと、自分のすぐ前の席に着いたではないか。それを知った途端、急になんだか話しかけたい衝動にかられた。

「河上さん、当分よろしく。」

美穂は驚いた顔をしている。

「あ、こ、こちらこそよろしく・・・。」

そしてまたバツと目をそらすと、前を向いてしまった。俺はひよつとして嫌われてる？

美穂はよく髪を編み込んでいた。手先が器用なのだ。そして今日も、本当にきれいに髪を編み込んでいる。その後姿を見て、純粹にこう思った。

またこの子と友達になりたい。

何も知らない俺

「最近さ、コーキ河上さんとよく喋ってるよね。」

哲平にもそう言われてしまう程こないだの吉住事件以来、美穂とはかなり話すようになったのだ。

「相変わらず山崎さんからもほとんど毎日メールが来るしな。」

「まじ！？鬼じゃん！」

食堂で俺は卵丼、哲平はカキフライ定食、リ्यूチはきつねうどんを食べながら、いつもの実咲ネタで盛り上がっていた。

「航紀、そりゃもういい加減メール返さねえ方がいいぞ。」

リ्यूチが割り箸を伸ばして哲平のカキフライを1つくすねた。

「あ！オレのカキフライ盗るなよー！」

哲平が意地になってリ्यूチのうどんの器を奪い取って、がむしやらに食べ始めた。

「おい、哲平！お前食い過ぎだ、なくなるじゃねえかー！」

つとまあこんな感じでいつも通りのテンションだ。

「北野哲平くんいる！？」

食堂の入り口辺りで、誰かが哲平を探し回っている。

「おい哲平、誰かが探してるぞ。」

暴れていたリ्यूチと哲平の動きが止まり、哲平が首を伸ばして向こう側を見ようとしている。そこへ、あちこち聞きまわってやつと見つけた様子で、担任の杉田がこちらへ早足でやってきた。

「北野くん、ちょっと大変なことになったのよ。すぐに自宅に帰るようにと親御さんからお電話があったの。」

哲平はガタツといきな立ち上がったと思うと、急いで食堂を出て行った。

「哲平ん家、どうかしたんですか？」

俺は思い切って杉田に聞いてみた。

「君たちは北野くんと仲がいいから、なんとか支えになってあげてちょうだい。」

さつき、北野くんのお爺様が事故でお亡くなりになったの。」

リユーチは箸をかちやりとテーブルの上に置いた。

「二人とも知っていると思うけど、北野くんの家は早くにお父様が亡くなられて、お爺様とお母様に育てられたようなものだから、きつと今回のことで落ち込んでしまっんじゃないかと心配してるのよ。よろしく頼むわね。」

俺は知らなかった。哲平の父親が早くに亡くなったということを、知りもしなかった。哲平のことを知ったつもりでいい気になっていた自分が、初めて何一つ知らなかったことに気付いて、急にただの友達面した馬鹿に見えてきた。

俺はいつたい何を期待してたんだろう？

数日やそこらで、哲平やリユーチのことを全部理解できるはずなんて、最初っからなかった。なのに、俺はいつたい何を・・・？

次の日、哲平は通夜の為、学校を休み、その次の日に俺とリユーチが葬式に招かれた。

「溝内くん、重家くん。」

哲平の家の玄関の前で、後ろから誰かに呼びかけられた。

「今日はわざわざ来てくれてありがとね。」

黒い着物を着た50代位の女の人は言った。

「おばさん、哲平の様子はどうですか？」

リユーチがこの人をおばさんと呼んだということは、どうやらこの人こそが哲平の母親であるらしい。

「案外平気そうにお葬式の準備とか色々と手伝ってくれてただけ

ど、さつき部屋に戻ったつ きり出てこないのよ。」

「そうですか、じゃあまた後で俺達が様子見に行ってみます。」

案外平気？そんなことはないはずだ。確実に哲平にとって大きな打撃になっていることは、この俺にでも分かる。

「ええ、そうしてもらえると助かるわ。ほら、あの子、4人兄弟の末っ子でしょ？おじいちゃ ん子だったもんだから……。あ、よかったらお線香あげてってくださいね。あなた達のこと、おじいちゃんお気に入りだったから、きつと喜ぶわ。」

哲平にとって、祖父の存在は、父親と同じくらい大きなものだったんだなあ。

そんなことを思いながら、俺は線香をあげた。実際、俺は以前に哲平の祖父と会ったことがあるはずだが、このことも知らない。写真を見たところ、どこことなく哲平と似ている。とても人柄のよさそうな人であった。リユーチも何も言わずに線香をあげていた。

「哲平。」

俺とリユーチは、哲平の様子を見に、部屋までやってきたのだった。部屋の隅で小さくなったまま動かない哲平の姿がそこにある。

リユーチはそれでも何も言わず、静かに歩み寄ると、近くで腰を降ろした。

何も言わないリユーチの優しさを、痛いほど感じた。

リユーチは黙って胸のポケットから煙草を取り出した。

「・・・じいちゃん、ひき逃げだったんだ・・・。」

哲平がうずくまったままボソツと呟くように言った。リユーチは黙ったままライターで煙草に火をつけた。

「お前、なんでおばさんの前で平気なフリしてんだよ。」

リユーチの一言はズシツと重かった。

「実際全然平気じゃねえじゃねえか、なんで平気なフリしてんだよ。」

心なしか、いつもよりも口調が厳しく、怒っているようだ。哲平は初めて顔を上げた。泣いてはいなかったが、いつもの元気のカケラさえもその表情からは感じられなかった。

「一番辛いのは母さんだから、オレがしっかりしなきゃ……。」

哲平は自分に言い聞かせるように言った。

「何バカなこと言ってるんだよ、お前も同じ位辛いくせに。」

リユーチの言葉はいつも皮肉っぱいが、人の気持ちを開放させるような、そんな不思議な力を持っていると思う。

「アホか。葬式つつうのは、死んだ人の為に泣いて送ってやる日なんだよ。お前の兄貴や姉貴は向こうで声出して泣いてたぞ。我慢すんじゃないよ。」

心が痛かった。俺は、リユーチのように、哲平に何一つ言葉をかけてやれなかった。俺はこの二人の優しさに甘えすぎていたんだ。自分から何も知ろうとはしなかった。これはきつとその罰なのだ。

リユーチは思っていた以上に大人だった。女のと看、この重家龍一に惚れてしまっていたのも無理はない。今の俺でされも、この男にひとく憧れを抱いてしまった程なのだから。

この後、哲平はリユーチにしがみついて泣きじゃくり、夕暮れ時に引き剥がすのが大変だった。今度は二人で俺の家に泊まりにくる気らしい……。

言い忘れていたけど、この一週間後に、ひき逃げ犯は無事逮捕されたそうだ。

リユーチの過去

いつもの帰り道、リユーチと別れ際に、ある誘いを受けた。

「航紀、来週の日曜暇あるか？」

俺達は毎日30分間バスに乗った上に、約20分間の徒歩で登下校している。その50分の間に言わずに、こんな別れ際に突然切り出すなんて、忘れていたのだろうか？全くリユーチにしたら珍しい。

「ああ、暇だけど？」

リユーチは急にモゴモゴと口ごもり始めた。

「来週俺の誕生日でよ、お袋がぜひ呼びしろってうるせえんだよ、来てやってくんね？」

よっぽどこのことを言うのが恥ずかしかったらしく、下を向いて小石を蹴飛ばしている。

「ああは、いいよ！行く行く。」

ちよつとリユーチの違う一面を見てしまったようで嬉しかった。

「哲平は試合で来れねえって言ってたし、航紀まで来れねえってことになったら、お袋めっちゃめっちゃへこんで大変なことになるとこだったぜ。」

リユーチはほつとして胸を撫で下ろした。なんでも、以前に哲平と俺がリユーチの家に行ったときに、ひどくおばさんに気に入られてしまったのだそうだ。

そういう訳で、俺はこうしてここ、リユーチの家でご馳走になることになった。今ここで一言言わせてもらえるのなら、とにかく“家がでかい！”と言いたい。もう一言二言付け加えるなら、“リユーチのおばさん綺麗すぎ！しかも料理美味すぎ！”っとまあこんな感じだ。だって、どう見たってリユーチの母親は35歳前後にしか見えないし、子供がいるようにはどうやったって見えない。それに抜群にお洒落で、リユーチからは考えられない程上品なのだ。

リユーチの話し方からすると、こんなにキレイな母親がいるなんて、誰も想像できないだろう。それに、なんと言っても料理が美味しい！どれも洋風料理で、どこかのレストランのシェフがキッチンに隠れているんじゃないかと思っただけくらいだ。

でも、あえておばさんに指摘するとしたら、挨拶代わりの“キス”だ。今日も俺が家に招き入れられたときに、

「航紀くん、いらっしやいー！」

なんて言いながら、訳もわからないうちにぶちゅっと一発頬にされてしまった……。

あのリユーチがどうもこのおばさんに頭が上がらないのが、なんとなくわかる。

「今日、哲平ちゃんが来られないなんて、おばさんすごくショックだわ。」

「しょうがねえだろ、アイツ試合なんだから。」

リユーチはフォークでウインナーを突き刺しながら言った。

「そうねえ。航紀くんが来てくれただけでも感謝しなきゃね。」

おばさんはちよつと残念そうな顔でリユーチの顔を見る。

「そういえば、龍ちゃんも航紀くんもバスケット部なのに試合は大丈夫なの？」

「ギクッ、以外におばさんは鋭い……。」

「いや、あの、俺休部中なんですよ。」

リユーチをちらつと見ると、いらんことを！とばかりに顔を渋めている。

「あら、そうなの？じゃあ龍ちゃんも休部中？」

この様子じゃ、リユーチはあまり学校のことなんかをおばさんに話してないようだ。

「ま、そのようなもんです。」

リユーチが答えようとしないので、代わりに俺が答えておいた。

「ふうん、龍ちゃん学校のこと全然話してくれあいもんだから、お

ばさん知らなくつ て・・・」

おばさんは困った顔で俺に愚痴をこぼす。リ्यूチは相変わらずうつとおしそうにしている。なんだか俺の方が気を遣ってしまう。しかし、おばさんは、リ्यूチに構わずリ्यूチの子供の頃の話を始めてしまった。俺もリ्यूチのことをもっと知りたかったし、興味があつたので、思わずその話に聞き入ってしまった。でも、リ्यूチが話に加わることはまずなかった。ときどき顔色をうかがってはみたが、不機嫌そうに一人黙々と食べている。おばさんの話によると、驚いたことに、おばさんとリ्यूチは、父親の仕事の関係で、13歳までアメリカのロスに住んでいたのだそうだ。

「この子ね、小さい頃からピアノをやってたね、コンクールでも何回か賞を貰ったのよ。」

リ्यूチがピアノ！？信じられない！

「でも、高校に入ってからのはめつきり弾かなくなっちゃったもんだから、おばさんすぐくもつ たいなくって・・・。」

リ्यूチはいらんことばかり言いやがってとばかりに、わざと食器の音を立ててハンバーグをつついていてる。

「あとね、小さい頃から近所の子とよくバスケットをして遊んでたもんだから、よっぽど好き なのねー、こっちの学校でも迷わずバスケット部に入ってたね。」

おばさんはウキウキしながら話しているが、俺はリ्यूチから発せられるピリピリするようなイライラを肌で感じてドキドキしていた。でも、リ्यूチがなぜバスケットが好きなのかがちょっとわかった。

「今、おじさんは？」

俺は何気なく聞いてみた。

「ええつと、今はロスに娘といえるのよ。会社を経営してるものだから。」

わかった！リ्यूチの家がなんででかいのか、おばさんの洋風料理が特別美味しいのか！おいおい、父親がロスで社長かい！そりゃ金持ちだわ。でも、ある疑問が浮かび上がった。なんでおばさんとリユ

「イチだけが、日本に戻ってきたんだ？これはなぜか聞いてはいけないおうな気がして、俺はあえて聞かなかった。でも、こんなに大きい家に2人……。あまりに不自然な話だ。もしか、離婚……？」

「それにしても、航紀くんを見ていたら思い出すわあ。」

おばさんはニコニコしながら机にひじをついて俺をじつと見つめる。

「アレックスくんに雰囲気こそつ……」

「いい加減にしるよ……」

リユーチが突然怒鳴った為、おばさんはびっくりしている。急に立ち上がった勢いで、机の上のコップが倒れ、床が水浸しになった。

リユーチはナイフとフォークを持ったまま、怒りで肩を震わせている。こんなに怒ったリユーチを見るのは初めてだった。いつも冷静なリユーチが、まさかこんなに取り乱すなんて……。

「ガチャン！」

リユーチは持っていたナイフとフォークを机に投げつけると、椅子を蹴飛ばして、ツカツカと早足で部屋を飛び出して行ってしまった。

「私……。ついはいしゃいじゃって、おしゃべりがすぎちゃったのかもかもしれないわ……」

おばさんは深刻な顔をして考え込んでいる。

「リユーチ、いったいどうしたんですか？」

そろそろ怒るのではないかと予想はしていたものの、ここまで激怒するなんて思ってもみなかった。よっぽど気に障ることがあったのだろうか。俺には、“アレックス”という名前にひどく敏感に反応したように見えた気がした。それに、しつこいようだが、どうして2人だけ日本に戻ってきているのかが気になってしょうがない。

「ホントごめんなさいね、せっかく来ていただいたのに、こんなことになっちゃって。」

おばさんは立ち上がると、リユーチがこぼした水を、お手拭用のタオルで拭き取り始めた。

「いえ、それは構わないんですけど、おばさんは大丈夫ですか？」

見ると、おばさんの手は濡れたタオルを持ったまま止まっている。

「おばさん・・・？」

おばさんは目に涙をいっぱいに浮かべて、じっと動かない。

「こんなこと言ったら、またあの子に怒られるかもしれないんだけど、航紀ちゃんと哲平ちゃん はね、あの子が日本に戻って初めて気を許したお友達なの・・・。だから、どうしても知って おいて欲しくて・・・。」

俺と哲平がリ्यूチの初めて気を許した友達？何にもしくたって慕われるあのリ्यूチが・・・？

「俺もぜひ知りたいです。」

俺には何の迷いもなかった。もうこれ以上、哲平の時のように、何もできないのは絶対に嫌だ！ただ、そういう思いでいっぱいだったおばさんはタオルをその場に置くと元の席に座って、話し始めた。

「あの子、ロスで学校の先生を妊娠させてしまったの・・・。」

それは、あまりに強烈な一言だった。俺は、五階建てのビルの屋上から、鉄の桶を頭に落とされたぐらいの衝撃を受けた。一瞬自分の耳を疑った。

「相手の方は、当時22歳でね、その日、龍一はクリスマス会で先生の家にお呼ばれしていた の。それで、本人もよく覚えていないらしいんだけど、どうやら飲み物の中にアルコールが入ってたみたいで、それで酔っ払って羽目を・・・。」

俺は言葉を失った。はつきり言っただけで、仕方ないこと見損なった・・・。でも、当時13歳だったんだ、仕方のないことだったのだろうか？

「その後、周囲の目がガラリと変わってしまったって、私と龍一は逃げるようにこっちへ戻ってきたの。」

まるで外国の映画のような話だ。

「今、その人はどうしてるんですか・・・？」

しかし、この質問に対するおばさんの答えは、再び俺に大きな打撃を与えた。

「今、ニューヨークの方で龍一の子を育てているそうよ。」

この若さにして、リ्यूチにはすでに子供がいる……。これは1日では考えが追いつきそうもない！

「じゃ、じゃあ、さっきのアレックスって……？」

リ्यूチが激怒する程だ、何かあるはず。

「アレックスくんは、龍一の幼馴染でね、先生の弟さんなの。」

俺はハッとした。これで全てが1本の糸のように繋がった。リ्यूチが大好きなバスケットにあまり打ち込まなくなった理由、ピアノを止めてしまった理由、アレックスという名前にひどく敏感な理由……。

いつもリ्यूチは俺と哲平に悟られないように、一人でずっとこの重すぎる過去を背負っていたのだ。きっと俺がリ्यूチの立場なら、ここまで強くは生きられないだろう。現実を忘れようとはかりするだろう。でも、リ्यूチの場合、過去の過ちとして、ニューヨークにしっかりと子供が存在しているのだ。知ったところで俺にはどうしてやることもできないが、一緒にこの過去の過ちを共有することで、精神的にリ्यूチの支えになってやることくらいならできるんじゃないか、そんな気がした。いくら悔やんでも過ぎてしまったことは変えようがない。でも、これからリ्यूチができることがきつと何かあるはずだ。

リ्यूチを捜せ

次の日、案の定リ्यूチは学校に姿を現さなかった。

俺は重い口を開いて、哲平に昨日おばさんから聞いたことを全て話した。

「うつそ・・・リ्यूチに子供が・・・？」

哲平もひどく驚いた様子で、まだすぐには信じられそうもない。俺自身も、未だにまだ考えがまとまらずに、授業も右の耳から入って左の耳から抜けていくような始末である。哲平も、この日は部活をやる気にはなれなかったらしく、珍しく俺と一緒に下校した。この帰り道、俺たちは一言もしゃべらなかった。唯一しゃべったと言えば、別れ際に、

「またな。」

つと言ったことぐらいだった。

その夜、俺の家に電話がかかってきた。

「お兄ちゃん、電話だよ！」

珍しいことに、携帯ではなく電話にかかってきたのだ。

「わかりました。」

俺が不思議に思って受話器を取ると、聞き覚えのある声だ。

『あつ、航紀くん！？重家ですけど、龍一そちらにお邪魔いてないかしら・・・？』

心配そうなその声は、紛れもなくリ्यूチのおばさんだった。

「え！リ्यूチまだ帰ってないんですか！？」

昨日出て行っただけ戻っていない！？

「そうなの、一日帰らないことはよくあるんだけど、こんなに長いとちよつと心配で・・・！」

もしかして家出？いや、どっかで飲んだくれて帰りに事故ったの

かも・・・！こんな考えが一　拳に浮かんだ。

「とりあえず、哲平とも連絡とって、俺達も探しに行きます！」

おばさんからの電話を切ったあと、慌てて哲平を呼び出して俺達はリ्यूチの行きそうな場所を探し回った。公園、学校、近くの映画館・・・。後輩やバスケ仲間にも1人1人連絡をとってもみたが、何の手がかりもつかめない。俺たちが学校近くの公園を出たとき、時計はすでに11時半を回っていた。

「ちつくしよ、どこ行っただろ・・・。もう捜すアテなんて・・・。」

「あつ！待って！」

哲平が思い出したように、自分の財布から、白い名刺のような物を取り出した。

「これ、リ्यूチがよく行ってくつて言ってた店のなんだけど、もしかしたらここにいるかも。」

バンドラ

PANDORA、この店は俺も知っていた。以前から何度もその前を通ったことともあったし、結構人気の店であるらしく、ときどき道端で広告を渡されることもあったからだ。ただ、あそこは未成年者立ち入り禁止のはずだ。でもまあ、リ्यूチがそこへの常連であっても、誰も疑いはしないだろうが。

俺と哲平がPANDORAの前までやってくると、入り口の辺りでは相当酒の回った人達がビールを片手に大いに盛り上がっている。こりゃあ店内に入るのはちょっと大変そうだ。

「コーキ、中に入って見てきてよ。オレ絶対バレちゃうから！」

確かにどちらか片方がここに残るって言うのは賛成だった。ひよつとしたら入れ違いになる可能性もあるし、未成年であることがバレたときに、2人共が捕まらないで済む。でも、俺が中に入るのもどうかと思う。確かに哲平は部活上髪は染めてないし、しかも童顔と来た。10人に聞いたとしたら、10人ともがどこからどう見ても学生に見える、と答えるだろう。それに比べたら、いくら俺の方がまだマシかもしれないが、バレない自信なんてない。

「俺！？俺だつて絶対バレるつて！」

つとは言つものの、結局どちらか1人が中に入らなければならないのだ。

「絶対大丈夫だつて。」

ほら、いつも道端でホスト勧められてんじゃん。コーキで無理なら誰も入れないよ。」

はい！？俺つて道端でホストの勧誘受けてんの？し、知らなかった・・・。

「わかったよ、しゃーない、行つてくる。」

とうとう俺は観念して、しぶしぶ店の入り口に向かった。

「おい。」

なるべく早足で溜まつている人達の間を取り抜けようとしたのだが、やはり絡まれてしまった。

「ちよつとちよつと、まあここに座れつて。」

これはかなり酔つ払っている。

「いや、あの、急いでるんで・・・！」

服の袖を引っ張ってくる男をかなり強引に振り払つて、なんとか店に入ることができた。

どうやら年はバレていないようだ？中は思ったより広く、ガンガン鳴り響く音楽の中で若い人でひしめいてる中からリ्यूチを捜すのは一苦労だ。とりあえずバーのところまでやってきたが、一通り見たところリ्यूチらしき人物はいない。じゃあやっぱりこの人ゴミの中に・・・？

「ねー、キミ。誰か搜してるの？」

バーで座つてカクテルを飲む3人組の女が話しかけてきた。高校生の自分からすると、相当化粧が濃い。いや、待てよ・・・。もしかしてリ्यूチのこと何か知ってるかも？

「あ、重家龍一って知ってます？」

思わず敬語でしゃべてしまった！やばい、ばれる！？

「うん、知ってる知ってる。」

やった、ビンゴ！この人達も常連客のようだ。

「さっきまでここに居ただけだねー、なんかあったらしくて飲みすぎてデロンデロンになっ ちゃって。」

やっぱりリユーチはここにいたんだ！じゃあ今はどこに・・・？

「ホ、ホントですか！？」

3人はきよんとしている。

「うん、ホントだよ。ほんのちょっと前にエイコがお持ち帰りしちゃたけどね、ハハ。」

はいっ！？お持ち帰り！？リユーチー！お前ちょっとやりすぎだバカヤロー！！

「エイコずっと龍一くんのこと狙ってたもんねー！なんか腹たってきちゃった。」

ひよっとして、リユーチにとってはこんなことは日常茶飯事だったりするのかもしれない・・・。そんな不安が頭をよぎる。

「アイツ、よくこういうことあるんですか・・・？」

3人のうち1人がタバコを取り出して火をつけ始めた。

「龍一くん？あの子は結構遊んでるわよー。相当お金も持ってるみたいだし。」

哲平は知っているのだろうか。リユーチが酒とタバコだけでは飽き足らず、女にまで走っていることを・・・でも、リユーチの気持ちもわからないこともない。だからと言って限度というものもあるんじゃないか！？

「でもさ、龍一くんって来る者は拒まないけど、絶対にキス以上のことはしないよねー、あり や絶対女いるよ！」

ここにいるときのリユーチは、俺達の知っているリユーチではないようだ。でも、やはりロスでの1件を引きずっている為、まだそれがなんとか歯止めとなっているようだ。今ならまだ立ち直れる、なんとなくそんな気がした。

「だけど今日はあれだけ酔っちゃってたら、エイコの思うツボでしょー。」

「やーだ、キヨミつたら！まるでエイコが悪役みたいじゃーん。」
「だってそうじゃん？」

エイコがどうだか知らないけど、リユーチはいつたいどこ連れてかれたんだよ、肝心なのはソコだろうが。

「それよりさー、キミなんて名前？今からアタシ達飲み会行くんだけど一緒に行かない？」

こりゃあ実咲よりも手強そうだ。

「あ、溝内です。今日は急いでるんで！アイツがどこ連れてかれたかわかります？」

3人は顔を見合わせて首をかしげている。

「違うわよ、名字じゃなくて名前！」

名字でも名前でもどっちでもいいだろが！！

「航紀です。それで、なんか聞いてないですか！？」

イラ立ちがついつい顔に出る。

「うーん・・・、聞いてはいないけど、こっから一番近いホテルなんじゃない？」

俺のイラ立ちを知ってか知らずか、相変わらず話すペースはのんびりだ。1番近いホテル・・・か・・・。

「ねーねー、コーキくん。あたしたちに付き合ってよ。」

女の1人が飲んでいたカクテルを進めてくる。

「いや、ホント今日は急ぎの用があるんで！外に連れを待たせてますし。」

女達はとてつもなく残念そうな顔をしている。

「えー、彼女・・・？」

こんな話をしてる場合じゃないんだって。

「男ですって。。じゃあ、そろそろ・・・。」

なんとか無理矢理話を切り上げて立ち去ろうとすると、女の1人に腕をぐつと引っ張られた。そして何やら丸めた紙を手の中に隠すようにも持たせてきた。

「これ、アタシの携帯の番号。連絡ちょうだいね。」

つと耳元で囁くと、つかんでいた手をすつと離れた。やばい・・・。
哲平を中に連れて来なくてよかった・・・。

それより今はリューチが先だ！また同じ過ちを繰り返させてたまるか！こんな感情は女ときには決して持たなかった。女と男は単に体つきが違っただけでなく、確実に精神状態や感情の表れ方も違うんだな、つとこんなに冷静な自分が感じているのを不思議に思う。

「PANDORAから1番近いホテルで言ったら、ここしかないよね・・・。」

俺と哲平は周りの目を気にすることもなく、迷わずツカツカをホテルに入っただけだった。そしてカウンターでリューチの名前がリストにないか、急いで調べてもらう。もうここにいなければ諦めるしか・・・。

「あつ、ありました。重家様。ただ今53号室を御使用になられております。」

その言葉を聞いた後、俺はどうやって53号室まで来たかも覚えていない。気がつくと、哲平と2人でゼエゼエ言いながら部屋のドアをバンバン叩いていたのだ。

「だ、誰・・・？」

部屋のドアがガチャリと開く。ほんのちよつとの隙間から、ロープ姿の女が顔を覗かせる。これがエイコなのだろうか。リューチは！？俺は構わずにドアの隙間に手を入れると、そのまま体を滑り込ませた。

「えっ、何！？なんなのキミ！！」

エイコは混乱してアタフタしている。哲平も続いて部屋に入った。部屋に入った瞬間、大きなベッドの上でうつ伏せで寝っ転がっているリューチの姿が目飛び込んできた。まだエイコとは何もないようだ。それどころか、酔い潰れてグースカと俺達が来たことに気付きもせずに熟睡している。俺は近くにあったグラスを引っつかむと、風呂場へ行っただけで水がいれ、寝ているリューチの頭へぶっかけてやった。

「リユーチ！起きろっ。」

エイコはいきなり入ってきた男が、水までリユーチにかけたのを見て驚いて口をパクパクさせている。

「あん・・・？」

リユーチが気分悪そうにむっくりと起き上がった。ぽけーっとして、今どいう状況なのか分かっていないようだ。

「帰るぞ。あんまりおばさんに心配かけんじゃねえよ。」

「リユーチが起き上がるのをなんとか手助けしてやる。」

「あれ、なんでお前ここにいんの？哲平も・・・。」

リユーチはきよんとしている。

「おばさんから電話があつて、迎えに来たんだよ。」

やっと状況が飲み込めてきたのか、リユーチは小難しい顔をして頷いた。

「ちよつと、キミ達いきなり何なの！？」

エイコの反撃がようやく始まった。

「俺達、こいつの友達なんです。すいませんけど、今日のところは連れて帰りますんで。」

リユーチを無理矢理引き起こすと、腕を引っ掴んで部屋を飛び出した。足元のおぼつかないリユーチに構うことなく、俺は無言でズンズンと歩いた。

「コーキ、コーキ！」

哲平が後ろから小走りで呼ぶ。

「なんだよ。」

なんでかイライラして答える俺。

「もうここまで来たら誰も追ってこないんじゃない？一体どこ行く気だよ！」

そう言われて思わず足を止めた。ヨタヨタのリユーチは息を切らし、半分俺に引きずられている。俺は一体どこへ行くつもりだったのか？別に宛てなんてない。それに俺がイライラする必要だってな

い。じゃあなんで俺はこんなにイラついてるんだ？

「お前、昨日お袋に俺の過去を聞いたのかよ。」

今まで何も言わなかったリユーチが、急につばやいた。

「聞いたよ。哲平にも話した。」

哲平はいつになく真剣な顔をしている。

「そうか・・・。」

あきらめたようにリユーチは溜息を漏らした。

「なんで今まで俺達にナイショにしてたの？」

哲平が今回初めて口を開いた。そうだ、俺がイライラしてたのは、リユーチが1人で悩んで俺達にさえ隠していたからなのだ。

「言える訳ねえだろ・・・あの件以来、ロスの友達はみんな俺のことで軽蔑しちまって離れていった。お前らは日本で初めてできたダチだったんだ。また離れてかれちまうくらいなら、絶対隠し通そうと思った。」

びっくりした。俺は最初からリユーチや哲平と過ごした記憶を持っている訳じゃないけど、初めてリユーチの本心を耳にした気がした。まさかあの大人びていつも冷静なリユーチが、いつもこんなことを思っていたなんて・・・。

「バカ！オレたちがリユーチのこと嫌いになるはずないだろ！？いったい何年友達やってるんだよ。」

いつもの頼りない子供っぽさを感じさせない、哲平の妙にしっかりした言葉だった。リユーチはがっくりとうな垂れて何も言わない。

ときどき小刻みに震えているようだ。リユーチはまさか泣いて・・・？

「それよりさ、今からラーメン食べに行こうよっ！オレお腹空いちやってさ。」

哲平はリユーチの袖をぐいと引っ張った。

「・・・おい、哲平、もしかして俺におごらせる気じゃねえだろな。」

さすが哲平、どうやらいつものリユーチに戻ったようだ。

「あつたりまえじゃん。」

「アホかつ！誰がためえの為に金使うか。」

リユーチの決心

「あゝ、食った食った。」

さつき俺と哲平とリユーチの3人は、近くの中華料理店でたらふく夕飯を食べたばかりだった。そのついでにリユーチが俺の家に泊まると言い出して、哲平もその意見に大賛成したおかげで、今こうして俺は部屋の床を掃除するはめになってしまったのだ。

「お前らなー、うちにも都合つてもんがあるんだからな。」

母親はいきなり2人が泊まると知って、どうやら慌てて家中をかたずけたり飾りつけたりしているらしく、下でバタバタとせわしなく音がする。いつもはしないクセして……。隣の部屋からはキヤーキヤーと甲高い声がして騒がしい。

「まーまー、今日は航紀と腹割って話をしようと思って、実は哲平と計画してたワケよ。」

計画！？そんな急な話あるかよ、バカヤロウ。

「そうなの、オレたちズバリ、コーキに質問したいことがいくつかあるんだよねー、リユーチ。」

「航紀、お前さ、ホントのとどこまで記憶あんの？」

やつぱりきたか、この質問……。いつかはくるだろうと思っていたけど、極力この話題は避けたかった。

「・・・記憶がなくなつたあの日以前の記憶が全くない・・・。」

リユーチはポリポリと頭をかいた。

「んー・・・？たとえば？」

長い付き合いであるらしい哲平とリユーチに本当のことを言うのはなんだか胸が痛む。

「リユーチと哲平とのことがすっぱりそのまんま・・・。部活のことで、自分がどんな性格でどんなやつなのか・・・。」

でも、ホントのことを言うと、俺の場合、記憶を失くしたのではなく、最初っからないのだ。

「そつか……。でもさ、コーキ記憶失くす前と全然変わってないよ。ずっとこんな感じだった。」

哲平はごろんと床に寝っ転がってお腹をさすっている。

それにしても、少し安心した。実を言うと、今の自分のどこまでがホントの自分なのか分からなくなりかけていたのだ。今の自分の存在は、なんだか嘘の存在のような気がして……。

「心配することねえよ。たかがストレス性の記憶喪失だ。すぐ戻るって。」

リ्यूチはさっそくタバコに火をつけている。

この間のホテル事件以来、タバコと女はやめたのかと思っていたが、そうではないらしい。相変わらず、しょっちゅうPANDORAにも通っているし、タバコも今まで通り吸っている。

「それよかよ、航紀、こないだ俺のこと捜してPANDORA行っただったって？」

ドキッ！俺の考えてることとあまりにタイミングがよすぎて、思わず焦ってしまう。

「えっ、なんで知ってたんだよ！」

哲平は何焦ってたかばかりに、不思議そうに俺を見ている。

「お前、3人組の女と話しただろ？そいつらから聞いたんだよ。」

ああ、あのやたらに化粧の濃い……。

「そう言えば、あのエイコさんって人怒ってなかった？」

哲平もちよつと心配していたらしく、急に飛び起きた。

「ああ、こないだのホテル代返したらケロっとしてやがるよ。ってさり気なくためえ話すり替えただろ。」

さ、さすがリ्यूチ、鋭い……。

「マコが連絡くれねーって俺にうるさいんだよ。お前連絡入れてやってねえの？」

マコ？連絡？……があああ！あのときはリ्यूチを捜すのに必死で、それどころじゃなかったから気にもしてなかったけど、確かに3人の中の1人に帰りがけに連絡くれって番号書いた紙もらった

覚えが・・・。

「え・・・、やっぱり入れなきゃダメ？」

哲平は目をキラキラをさせて座り直した。

「ナニナニ！？コーキ、女の人に気に入られちゃったの？」

こいつ、絶対おもしろがってる。人の気も知らないで。とりあえず、あの時来ていたジーンズのポケットを探るってみると、やっぱりあの時の紙が出てきた。藤田真・・・か・・・。

女のとぎってこんなにモテたっけ・・・。

「あつ、ちゃんと残ってるじゃねえかよ。ほら、今すぐ電話入れる。」

リ्यूチは携帯をひゅつと俺に投げ渡した。

話しろつつたつて、いきなり“航紀でーす、こないだはどうも！これからカラオケでも行きませんか？”って言ったりするワケ！？ムリだよ、ムリ！！

「可哀想じゃん、そのマコさんって人、期待して待ってるんだよきつと〜。」

畜生、哲平め、どこまでもこいつは。

「俺あの人ら苦手なんだよ。連絡つつたつて〜・・・。」

つてさつそく電話かけてんじゃねえよ、リ्यूチ！

「あ、マコ？俺俺〜。今ここに航紀いるからかわるわな！。

トホホ・・・、やっぱりこうなるのね。

『あつ、もしもし航紀くん？なんで連絡くれなかったの〜？アタシずっと待つてたんだよお〜』

「あ〜、いやちよつとバタバタしてて・・・。」

哲平がニヤニヤしながら電話の声を聞き取るうとしてくる。

『でもよかった、また話せて！ねえ、アタシ達ほとんど毎日PAN DORAにいるから、今度 龍一くんと一緒に来てよ！』

「えっ、はい。」

あ〜、やつぱりこうなるんだ、トホホ・・・。

『じゃ、その時に番号教えてねー、楽しみにしてるからっ。』

思ったより早く電話は切れたが、またしても面倒な約束をしてしまった。相変わらず悪い癖だ。

「ぶぶつ・・・」

1番に吹き出したのは、やっぱり哲平だった。

「あはははははっ、コーキの焦りようつたらツボにはまる～～!!」
ムカツ。こいつ、いっぺん絞めたるかつ!

「哲平、お前人事だと思って。」

「うわ!? いてててつ、コーキ、はやまらないでつ、いでつ。」

俺が哲平の腕をひねって二人で格闘している様子をリユーチはなんとも満足げにタバコをふかしながら眺めている。ったく、どいつもこいつも。ようやく哲平がヒィヒィ言いながら謝ってきたので、解放してやると、ほんの少しの沈黙が続いた。

正直言つて、リユーチのホテルの件ではあまりに首を突っ込みすぎたと反省している。あれでリユーチに愛想をつかされたとしても、文句なんか言えるはずはない。その上、都合よく俺には1番大切だった親友達の記憶がないのだ。まさか、またこんなに元の仲に戻れるとは思ってもみなかった。これは、今の哲平もリユーチも同じことを感じているはずだ。それ程、俺の知らない3人の間の信頼関係が深いと言つことなのだろう。その証に、アルバムを見てみると中学から高校にかけての学校行事の写真には、この2人がたいてい写っている。

「リユーチ、あのさ、古傷をえぐるようだけど、ちゃんと聞いておきたいことがあるんだ。」

俺はこの沈黙を破り、ついにリユーチの過去の話を持ち出した。リユーチはタバコを、俺が別の部屋から持ってきた父親の白い灰皿の上でぎゅっと押し潰すと、3回位頷いた。

「リユーチは今ニューヨークにいるっていう自分の子の顔って見たことあるのか?」

リユーチはポケットからまた新しいタバコを取り出そうとしたが、

突然やめてあぐらをかいた足の上に乘せた。

「一回だけ写真でな。」

そういわれると、分かってはいたが、なんだかますます現実味を帯びてくる。今、俺と哲平の前にいる、同じ年で誰が見てもかっこいいこの少年に、まさか子供がいるなんて今だにピンとこない。

「ねえ、ホントにリ्यूチの子なの！？もしかして違うつてことない・・・？」

哲平もまだ信じたくない気持ちがあるのだろう、どうにかリ्यूチの口から“違います”という言葉を出させたいようだ。

「いや、間違いなく俺の子だ。黄色人種の父親である証拠に。母親がブロンドなのに対して、子供は黒髪だった。」

この数日の間で、リ्यूチはまたしても大人になった気がする。この話し方からして、どうやら過去を全て受け入れたように俺には見えた。

「今、その子と母親はニューヨークでどうやって生活を？」

こんなこと聞くななんて、俺もずいぶん無神経だと思う。でも、哲平の祖父のときみたいに、

何もできないなんて絶対に避けたかった。たとえそれが、リ्यूチの心の傷を再び開くことになったとしても、ちゃんと知っておいて、どんなことでもいい、役に立ちたかったのだ。

「親父がロスから毎月仕送りしてる。あと、ニューヨークの学校でも教師続けてるみたいだから、その給料とでまかなってんじやねえかな。」

そうか、リ्यूチの父親はロスで会社を経営してるんだもん、女1人と子1人が暮らしていけるだけの金なんてすぐに・・・。

「・・・リ्यूチ、悪い、その子って今いくつだっけ・・・？」

急に俺の中で何か引がかかった。

「そんなこと聞いてどうすんだよ。」

リ्यूチは変な顔をしている。

「いいから！何歳？」

そう、何か引つかかる・・・。

「こないだ届いた手紙には4つって書いてあったぜ。」

4つ・・・。黒髪か・・・。これの何が引つかかるって言うんだ？自分でも妙だった。ホントに。

「お兄ちゃん、入ってもいい？」

すぐドアの向こうで真希の声がした。

「あ、ああ。」

俺は慌てて妙な迷いを吹っ切った。

ドアが開いて、真希がトランプを片手に入ってくる。後ろには見覚えのあるぼっちゃりした子と、髪を1つに束ねた子もいる。

「こんにちは、お邪魔してます。」

この子達は確か、以前にも家に遊びに来ていた。

「こつちの子が瑠美子、そつちの子が昌代。」

真希は丁寧な2人の友達を俺達に紹介した。

ぼっちゃりした子が昌代ちゃん、1つに束ねた子が瑠美子ちゃんらしい。

「いらつしゃい、ゆつくりしてつてね。」

思わず女のときの癖で母親のようなことを言ってしまった！いやばい、気付かれた！？

「ぶっ！」

またしても哲平が吹き出した。

「コーキが言うとか妙々にあってるよね、ひやははっ。」

転がっていた座布団を哲平の顔に投げつけてやった。昌代ちゃんと瑠美子ちゃんは・・・と見ると、黙ったまま真っ赤になっている。やっぱまずかったかな。

「ね、ね、それよりお兄ちゃん達、一緒に大富豪やんない？」

真希が持っていたトランプを顔の前にかざしながら言った。

「おっ、大富豪！賛成、やるやる。」

案の定哲平が飛びついた。まあ気分転換にトランプもいいかも。そ

んな訳で、俺達6人は大富豪をすることになった。2時間半の間、俺達は大盛り上がりだった。

「哲平くん、見て見てー、これ真希の最高傑作の写真なの！」

すっかりゲームにも飽きて、いつの間にか個人的なトークに変わっていたが、それはそれでなかなかおもしろい、

「うわ、真希ちゃんこれどこで撮ったの！？UFOじゃん、すっげー！！」

真希が塾の帰りに撮ったという、ウソかホントか判らんような写真を見て、哲平は目を輝かせて夢中になっている。

「でしょでしょ！？真希ホントにこれテレビに出しちゃおうかなって思ってるの。」

おいおい、哲平、お前いったい何歳だよ。中3と思考レベル対張ってんじゃねーよ……。まあそこが女子の人気集めてる理由の1つになっただろうけども。

そんなこんなで、すっかり夜も更け、はしやぎすぎたせいか、妹達は床の上で寝入ってしまった。哲平はと見ると、真希と仲よさげにヨダレを垂らして爆水している。こいつ、ホントに高校生か？なんて思いながら、俺は4人に毛布をかけてやった。リ्यूチはすっかり静かになった部屋の壁にもたれかかって、一息ついたところで、一服でもしようと思ったのか、ポケットに手をやったが、タバコを切らしていることに気付き、手を引つ込めた。俺も散らかった床のトランプを足で掻き分け、自分の座り場所を確保して腰を下ろした。

「航紀。」

以外にも、リ्यूチが先に口を開いた。

「ん？」

哲平達を起こしてしまうのを気遣って、俺達は声を潜めた。

「俺、来週ニューヨークに行くてる。」

リ्यूチなら、たぶんそう言い出すだろうと予想はしていたから、さほど驚きはしなかった。

「来週つて、学校はどうする気だよ。」

だが、友達として簡単に賛成することはできない。それでもリ्यूチの場合、たびたびの欠席と遅刻で進級が心配されているのに、ニユーヨークなんて行つて、1日や2日で帰つて来られるとは思えない。

「ケイトにちゃんと謝罪したい。許してもらえるかはわからねえけど、このまま時間が経つて謝罪のチャンスを逃しちまうと、俺はこの先ずつと自分で自分が許せなくなると思う。」

一息ついて、リ्यूチは再び話し始めた。

「俺ももうガキじゃないし、自分がどんな取り返しのつかないことをしたかも十分理解してる。今だからちゃんと謝罪すべきなんじゃねえかと思う。」

リ्यूチの言うことは、10人いたら10人が納得いく理由だとは思ふ。でも、俺は単純にその理由に頷くことはできなかった。リ्यूチが次に言うことを、だいたい予想できたからだ。

「それで話し合つて、もしケイトがいいようなら、俺は学校を辞めてニユーヨークで住もうと 思ってる。結婚も考えてる。」

わかつてはいても、すごくショックだった。なんだか、急にリ्यूチが遠くに行つてしまうような気になった。

「リ्यूチ、せめて学校卒業してからじゃ駄目なのか？」

なんとかリ्यूチを引きとめたいと思つた。

「今じゃなきゃ駄目だ。」

リ्यूチの決心は相当固いものようだ。いくら俺達が止めたところで、彼は決心を変えないだろう。誰よりも相手のことを気遣う優しい男だからこそ、こう言い出すだろうと予測できたのだ。もしかしたら、リ्यूチはこのまま日本に帰つて来ることはないかもしれない…。記憶はなくても、長年の間に心に染み付いたリ्यूチとの思い出が、まるで自分の片腕をもぎとられるかのような辛さを感じさせた。

「そうか……。」

俺にはもう、彼を止める術はなかった。これは変えることのできない定めだったのかもしれない。

「このこと、哲平には黙っててほしい。話したら、ニューヨークまで一緒についてくつてごねるに決まってるだろうし。」

哲平は自分が眠っている間に、こんな話をされているなんてまさか考えもししていないかのように、寝息をたてて眠っている。

「わかった・・・。」

リ्यूチが突然うちに泊まるなんて言い出すなんて。何か変だと思っていたが、やはり裏にはこんなことが隠されていたのか。リ्यूチなりの別れの挨拶って訳か・・・。

この後、朝日が部屋の窓から差し込むまで、リ्यूチと俺は一言も話さなかった。

旅立ち

俺の家でのお泊り会以降、リ्यूチは柄にもなく、学校に1度の遅刻もせずによってきては、変わりなく時間を過ごし、ぴったり1週間後、出発の挨拶無しにニューヨークへと発って行った。

あまりにもあれ以来、この話に関することを何も口にしないので、俺自身もあれはリ्यूチの悪い冗談だったのではないかと思い始めていた矢先のことだった。予告どおり、リ्यूチは学校にピタリと顔を出さなくなったし、当たり前だが、携帯に電話やメールが入ることもなくなった。

「ねえ、最近リ्यूチどうしちゃったんだろうね。」

哲平が携帯をパタンと閉じながら言った。

珍しく今日は部活が休みだとかで、俺と哲平は帰宅を共にしていたのだ。そして思わずドキリとしてしまった。

「風邪なのかな。」

ぶつぶつと顔をしかめながら、あれでもない、これでもない、と考え込んでいる哲平は、突然あつと気が付いたように手を叩いた。

「そうだ！連絡もつかないことだし、オレ達で今からリ्यूチん家にお見舞いに行こうぜ！」

そうと決まれば話は早い、とばかりに足を速めた哲平は、俺の異変に気が付きふと足を止めた。つと言うのも、俺の足は相変わらずゆっくりとした動きからスピードを上げようとしないので、哲平との距離が大きく開いてしまったからだ。

「哲平、無駄だよ。」

ポツリと言った言葉を、哲平は理解できないのか、口をぽかんと開けている。

「何言つてんだよ、コーキ。無駄な訳ないじゃんか。」

哲平は少し怒ったような口調で、開いてしまった距離を縮めるように、ゆっくりとこちらへ歩みながら言った。自分自身もまだ、リユーチがニユーヨークに行ってしまったことに対して、信じたくない気持ちがあつたせいかな、どことなく自分に言い聞かせるような言い方になっていた。

「無駄なんだ。リユーチはいない、日本には。」

哲平の表情を見るのが怖くて、じつと自分の靴を見ていた。

「ど、どういふことだよ？」

心なしか、哲平の声は少し震えている。

「リユーチは、ニユーヨークにケジメをつけに行つたんだよ。」

そして、俺自身の声も震えていた。

「ニユーヨーク・・・？なんだよそれ、すぐ帰つて来るんだろ？」

哲平の顔さえ見ないが、今の哲平の顔は、今にも泣き出しそうになっているに違いない。ただならぬ気配を感じ取って、何となくよくない知らせを予感しているのだろう。

「いや、まだ分からないけど、相手の女性に謝罪して、話し合つて・・・それで結婚も考えてるって・・・。」

そう言い終わって、やっとじわじわとその事実が現実味を帯びてきた。

もう2度とリユーチと学校生活を共にできないかもしれない、それどころか、会うこともないかもしれない・・・。

そんな不安がブクブクと腹の底から湧き出してきて、頭の中をめちゃめちゃに引つ掻き回した。

「コーキ、なんでオレには一言も言ってくれなかったんだよ！」

不安がぐるぐると渦を巻いてフラつく頭で、やっとのことで哲平の

顔を見ると、哲平の唇はワナワナと怒りで震えていた。

その目は、まるで飼っていた鳥を不注意で他人に逃がされたような眼つきで、俺に対する思いをまざまざと物語っていた。

「お・俺だつてそんなこと信じたくなかつたんだよ！」

感情の高ぶりの末、抑えきれなくなつて飛び出した自らの言葉が、ごめんの一言でなく、こんな無責任な言葉であつたことに、自分でも驚いた。

「ああ、そうかよ。コーキとリユーチはいつもこれだ。いつもオレはガキ扱いかよ！」

男になつてからの記憶が少ししかないとえども、哲平がこんなに本気で怒る姿は初めて見た。いつもの空元気で明るい哲平から想像できるはずもなく、なんだか急に大人びて見えた。

「オレだけ何も知らないで、リユーチを行かせちゃつたのかよ。嘘だろ・・・!?」

リユーチに言われた通り、哲平にこのことを話さなかつたのは間違이었다と、心底後悔した。もし、万が一リユーチがこのままニューヨークから帰つて来ないとなると、哲平とリユーチはまともに別れの挨拶さえしていないことになる。こんな中途半端な別れ方があつていいはずがない。

「違うんだ、哲平。リユーチも俺もお前をガキ扱いなんかしてない。ただ、2人とも信じたくなかつただけなんだ。」

今になつて、リユーチがなぜ哲平にこの話を黙つていて欲しいと言つたのかをよくよく考えてみると、やはり、リユーチ自身も哲平との別れが惜しかったせいなのだろう。哲平1人がいるだけで、その場の空気がパツと明るくなる、そんな不思議なこの男を、どれだけ必要としているかは言うまでもない。それでなくても、リユーチは孤独な過去の過ちにけじめをつける為、たつた1人でニューヨークに旅立たなければならなかつたのだ。そんな時に哲平に引き止められたりなどすれば、せつかくの決心も揺らいでしまう、そうリユーチは考え、決断したのだろう。

「ごめん、コーキ。オレ・・・本当はこんなこと言おうとしたんじゃないんだ。」

哲平は思わず口走ってしまった言葉に、心底後悔したように唇を手で押さえながらしゅんと下を向いた。

「哲平は悪くない、言わなかった俺が悪いんだ。」

俺たち二人は下を向いたままとぼとぼと歩き始めた。

「へへ、どっちみちリューチのことだ、オレに言ったらうるさいから黙ってるってコーキのことと脅したんだろ？」

さっきまであんなに怒っていた哲平は嘘のように、照れ臭そうに笑いながら言った。

「げ、バレてた？」

俺も動揺を隠そうと、わざと明るい口調で言った。そこから15分程はギグシヤクした空気が流れたが、もう5分もすれば、2人はもう2度とその話題に触れなかったし、いつも関係に戻っていた。しかし、互いの心の中は、口に出さねども、リューチのことでいっぱいだったことは確かだ。

再会

長時間の飛行での疲労感と、時差ボケで頭痛のする体で、リユーチは懐かしい国、アメリカの地へと帰ってきた。海外渡航にしては少なすぎる荷物を手に空港を出ると、青い空とニューヨークの街並みがリユーチを出迎えた。巨大なビルや渋滞する車の列、クソ煩いクラクションの音、自由な足取りでショッピングを楽しむさまざまな人種のカップル達。まさにここは自由の街ニューヨーク。長い間話すこともなかった英語がやけに親しみを感じさせた。やはり長年育ってきた国だけに、早くもアメリカの文化を体で取り戻し始めている。

（懐かしいな・・・）

単純にそう思える自分に、そしてそうさせるこの街にも驚きを隠せなかった。

あまりの圧倒さに、思わず本来の目的を忘れかけていた頭を、手の甲で強く叩きつけ、意識を現実へと引き戻す。少し額がジンジンと痛んだが、気にもせず、ポケットからきれいに折り置かれた紙をおもむろに取り出した。盗難が多発するこの街で、荷物から目を離すことはあまりに危険な行為であり、馬鹿のすることだったので、リユーチはしっかりとスポーツバッグを肩に掛け、抱えるようにしてからその紙を片手にタクシーに乗り込んだ。その紙には、どうやら住所が書かれているようだった。タクシーの中年の太った運転手が、銀歯と金歯だらけの汚い歯を見せて、しっきりなしにベラベラと話掛けてきたが、リユーチは窓の外をぼんやりと眺め、何か考え込んでいて、ほとんど曖昧な返事しかしなかった。

「着いたよ、お客さん。」

そう言われてはっと気が付いたのは、タクシーに乗り込んでから30分程経った頃だった。

はて、渋滞をいつ抜け出したのか、思わず首をかしげながら、リユーチは運転手に金を渡すと、ぼうつとした足取りでタクシーを後にする。

「大丈夫かい、お客さん・・・？じゃ、俺は行くけどよ、なんか知らねえが、しつかりしろ　よ！」

太った運転手は、汚い歯で二カリと笑うと、クラクションを合図に去っていった。

あの運転手にはよほどリユーチの具合が悪くみえたらしい。よくしやべる割に、意外と心配はしてくれていたようだ。

リユーチはゆっくりと自分が立っている場所の周囲を見渡した。決して大きいとは言えない同じような家が、一直線にずらりと何10軒も軒を連ねている。その道を挟んで反対側に、ブランコや滑り台のある公園で、小さな子供たちが楽しそうにはしゃいでいるのが見えた。すぐ隣に、フェンスに囲まれた小さな広場があつて、その中にボロボロになったバスケットゴールが1つ立っている。そのすぐ下で、数人の青年たちがワイワイと溜まって何やら話しているところだった。

その光景を見ると、またしてもリユーチに懐かしさが込み上げてきた。大好きだったバスケットを、自分は一体何年やっていないだろう、と考えてみるが思い出せない。と言うよりも、タクシーの中にいるときから、頭を占領している、緊張感というやつが、他に何も考えさせてくれないと言った方が妥当だろう。そう、ここ数年感じたこともなかった緊張感が、リユーチを襲っていたのだ。

そのせいか、なかなか足が動こうとせず、気が付くと、手に持っていた紙がねつとりと汗で湿っていて、くしゃくしゃに握りつぶされてしまっていた。

しかし、リユーチには向かうべき家はどれなのか、はっきりと把握できていた。右から3軒目の家、あれがまさしくケイトの家なのであつた。

リユーチはただ怖かった。

何が怖いと言うと上手く説明しにくいのだが、自分の子供を直接目にするのが怖かったのだ。写真で1度は見たと言えども、本物を目の前にすると、もう後戻りはできないことを自分でも分かっている分、余計に恐怖を感じるのだろう。

でも、ここまで来て怖気づいて逃げる訳にはいかない。リ्यूチは、軽く深呼吸すると、いつもの冷静な顔つきと、迷いのない目で、一歩、一歩とケイトの住む家に向かって歩き始めた。

「おい、見ろよ、あれ。」

広場で溜まっていた青年のうちの1人がリ्यूチに気が付き、他の仲間呼びかけた。

「なんだあの派手な頭！見ない顔だな。」

不審に思った青年たちが口々に言い出した。

「あいつ、アレックスん家に向かって歩いてくみたいだぜ。」

広場の隅でガムを噛んで座り込んでいる一際大きな青年が、気に触ったように顔をしかめた。

「なんだって？」

他の仲間たちが見つめる先に体を向けると、すつくと立ち上がった。がたいが大きく、骨組みのがっちりしたその青年は、身長もかなりあることがわかった。耳や下唇にいくつものピアスをしていて、決して柄がいいとは言えない。

「アレックス、あいつ、お前の知り合いかよ？」

仲間にそう尋ねられて、アレックスという名のその青年は、むつかしい顔をしたまま首をかしげている。

「いや、知らねえなあ……。どうせまた喧嘩吹っ掛けに来た奴だろ。」

青年たちはニヤリと顔を見合わせて笑うと、からかってやろうとばかりに、ぞろぞろと広場を出た。

（この家か……。）

リユーチがケイトの家の正面まで来ると、

「おい、にわとりヤロー、アレックスの家に何の用だよ。」

つと、背後から好戦的な声を掛けられた。

真紅に染めた髪の方の顔が、振り返って見えた途端、青年たちはドキリとした。

思っていたよりも丹精な顔立ちのアジア系の人種だったせいもあるだろうが、それよりも、彼に全く威嚇的な表情や、慌てた表情が窺えず、落ち着いた様子だったせいだ。

「お・・・お前・・・」

でも、その中でも特に驚きを隠せなかったのが、アレックスだった。アレックスは、まるで死んだ人間が生き返ったかのように、目を丸くしている。

「アレックス・・・？」

仲間たちはそんなアレックスを不思議に思ったのか、表情を覗き込もうとした。

「わ、悪い・・・、お前ら、今日のところは帰ってくれ。今度何かおごるからよ。」

アレックスはわざとらしい笑みで強引に仲間の背中をぐいぐいと押して追い返し始めた。

「ちえっ、なんなんだよ、全く。アレックスらしくもねえ。」

ブツブツと文句を言いつつも、アレックスには歯向かえないようにでしびしび離れていく青年たちの後に、厳つい青年アレックスと、真紅の髪のリユーチが2人向かい合ったまま残された。

「おう、久しぶり。」

リユーチは相変わらず冷静な顔つきのまま口を開いた。

「お前、その・・・日本で元気してたかよ？」

アレックスはリユーチに気遣っているのか、頭を照れ臭そうにポリポリと掻きながら言った。

「まあな。」

数年前、アレックスの姉ケイトと、ああいう事になってしまっ

らと言うもの、リユーチは親友であり、幼馴染みであつたアレックスに合わせる顔がなく、この再会が事件依頼初めての会話となつた。「アレックス、悪かつたな。今更かもしれないけど、一言謝りたくてな。」

アレックスの体がピクリと反応する。

そしてあることに気が付いた。

よく見ると、ここ数年見ないうちに、リユーチの眼つきがすっかり変わってしまったのだ。以前はあんなにやんちゃで、純粹な眼をしていたリユーチだったが、今日の前にいるリユーチの眼は、すっかり大人びて、どこことなく冷たさを感じさせるものがあつた。それは、成長によるものというよりは、どちらかと言うと、苦悩の末によるものであるう。

「リユーチ。違うんだ。実は・・・。」

アレックスが深刻な顔で何か言おうとしたその瞬間、『ガチャリ』と家のドアが開き、

「アレックス兄ちゃん！ボクね、ボクね、さっきママに褒められたんだよ！」

つと、まだほんの幼い少年が勢いよく飛び出してきた。

「こらっ！マイク、待ちなさい！服は着替えたの？」

その少年の後を追うように、スラリとしたブロンドの女がドアの外に姿を現した。

そして、何かおかしな空気を感じ取つたのか、ふと顔を上げると、リユーチを見るなり真っ青になつて動きを止めた。

「リュ、リユーイチ・・・！どうしてここに！？」

リユーチはケイトとの突然の再会にどう対処していいか分からず、アレックスの足にじゃれつくマイクという少年に目をやった。

彼の眼と髪は黒かつた。

アレックスはそんな2人を気遣つてか、とりあえず家の外ではまずいと、リユーチを家の中へと招き入れた。家の中は、決して広いとは言えないが、きれいに片付けられており、小物などで飾りつけら

れていた。こじんまりとした部屋のソファに腰を掛け、コーヒーとクッキーを出されたが、リユーチは口をつけようとしなかった。マイクはどこか別の部屋に連れて行かれたらしい。

「突然来るんだもの、びっくりするじゃない。来るんなら連絡くらいくればいいのに。」

ケイトは、なんだか落ち着かない様子でコーヒーを一口飲んだ。

「俺、どうしてもケイトに謝りたくて来たんだ。」

アレックスとケイトの眉が小さく動いた。

「あ、謝るって何を？」

ケイトは真っ直ぐなリユーチの目線から逸らすようにして、やや左下の方を見ている。

「今更だっと思ってられるってわかつてはいたけど、俺、あの頃よりずっと成長したし、自分のやった罪の重さもちゃんと理解してるつもりだ。だから・・・。」

リユーチはすつくと立ち上がると、そのままドンと膝を床につき、両手をついて額を床に擦りつけた。

それは、疑いようもなく土下座の姿勢だった。

「リユ、リユーイチ、お願いやめて！もうやめて！」

ケイトはひどく動揺して、カタカタと震わせながらコーヒーを机の上に置いた。

「許してもらえるなんて思ってない。けど、自分のしたことに責任を取りたい。一生かかっても償っていききたいと思っている。」

土下座をしたまま、リユーチがそう強く言い切ると、ケイトはガタガタと震えたまま、真っ青な顔で狂ったように泣き始めた。

「悪い、リユーイチ、今日はもう帰ってくれ。」

様子を見かねたアレックスが、とうとうリユーチを無理矢理引き起こすと、またもや強引に家から追い出した。

「わざわざ家まで来てくれたのに、悪いな。」

けど、ケイトは見ての通りだ。ケイトにあの話題は禁句なんだよ。本当に悪いけど、もう顔は出さないでくれ。」

ケイト同様、目線を合わさないようにして、アレックスはリユーチをドアの外に置き去りにしたまま、ボタンと謝絶するようにドアを閉めてしまった。

時刻はすでに夕暮れ時で、日が傾き始めていた。ある程度の覚悟をしていたとは言え、これにはさすがのリユーチも堪えた。

「リユーチ！これ位で落ち込むとか、らしくないじゃん。」
すぐ隣で哲平の声がしたような気がした。

「そうだよな、らしくねえよな・・・俺はこれからどうすればいい？なあ、航紀・・・」

アレックスに無造作に放り投げられ、地面に転がっているスポーツバッグを拾い上げると、リユーチは空を見上げた。

（今俺がするべきことは、とりあえず当分寝泊りする所を探すことか・・・。）

見上げた空が、航紀や哲平がいる日本の空とも繋がっていることだけが、リユーチの気持ちをほんの少しだけ和らげてくれていた。

気持ち

リ्यूチがニューヨークに発ってから、ちょうど1週間が過ぎた日のこと、6限目のHRで、来月の修学旅行の班決めをする事になった。

「5、6人のメンバーで班を編成してください。」

修学旅行委員が面倒臭そうに教卓の前に立って説明している。

「コーキ、コーキ！もち同じ班だよな！」

とたたつ、と身軽な走りで駆け寄ってきたのは、相変わらずの哲平だった。その手には、いかにもやる気満々と言った様子で、メンバーの名前を書き込む為のシャープペンとルーズリーフがしっかりと握られている。

「あ・・・、うん。」

俺は、机の中に隠していたポッキーの1本を爪楊枝のように咥えたまま、さほど興味も関心もないような返事をした。

「えーと、やっぱりリ्यूチもメンバーっしょ。」

そう言つと、哲平は熱心に、持っていたルーズリーフに俺とリ्यूチの名前を書き込む。その様子を見て。ふとリ्यूチがいないことに寂しさを感じた。

「そうだな・・・。もしかして、修学旅行までには帰ってくるかもしれないしな。」

長いこと咥えたままでいたせいで、チョコレートが半分溶けかかっているポッキーをポリポリと食べながら、はたと考えた。

そう言えば、他のメンバーってどうなるんだろ。

そんな考えに追い討ちを掛けるように、修学旅行委員が説明に言葉を付け足した。

「えーと、ちなみにメンバーは必ず男女混合になるようにしてください。」

そういい終わると同時に、教室中が急に熱気を帯びたように騒がしくなった。ひよっとすると、室温が3度程上昇したんじゃないだろうか。皆、高校での修学旅行と言う大イベントを、少しでもいい物にしようと必死なのだ。

「ど、どうする？誰誘う？」

「チャンスだよ！やっぱあの子誘っちゃおうよー！」

なんて言うピンク色の女子の声や

「おい、お前あの子呼んで来いよ。」

「バカっ！声がでかいんだよ！」

なんて言う興奮気味の男子のからかい声が飛び回っている。

「ねーねー、コーキ。オレ達はどうする？」

呆れたように机に突っ伏したまま、またもや次のポツキを齧っている俺の前に立って、哲平が少々焦りながら言う。

「え？俺はもう誰でもいいよ。考えるのが面倒臭いし。」

反応の薄い俺の様子を見て、哲平が見るからに拗ねているのがわかる。

「なんだよ、つまんないの。」

口を尖がらせながら、すぐ隣の机にひょいっと座ったまま、哲平は黙り込んだ。

周囲はどんどんメンバーが決まっていくらしく、少しずつ耳障りなざわめきが落ち着いてきた。

「まだ班のメンバーが決まっていない人は挙手して下さい。」

気だるそうに、修学旅行委員が教卓の前でぐるりと教室を見回しながら言った。彼の心境はきつとこんなものだろう。

（なんで僕がこんな面倒臭いことしなきゃいけないんだ。あるときジャンケンでパーを出して いたら、今頃は気楽にできたのに・・・。）

「はいはいは〜い。」

大声で返事をしながら手を挙げたのは、机の上に座ったまま、足をぶらぶらさせている哲平だった。

手を挙げているのが哲平と気付いた途端、再び教室が騒がしくなった。

「えーっ!」

あちこちからそんな声が飛び交う。まさか、あの人懐っこい哲平が余っているなんて、誰も予想できなかったのだろう。逆に、すでに先約があるものと踏んで、誰も誘わなかったに違いない。

「あ、ちようど3人同士で人数もぴったりだし、オレ達河上さん達と組むよ。」

そう言った哲平の言葉に、思わずポツキーを齧る口を止める。

河上・・・？河上って、美穂・・・？

哲平の言っていることにいまい理解できなくて、机に伏せていた頭を少しだけ上げて、教室の端っこで、手を挙げている3人の女子を見た。

美穂！？朋美！？小百合！？

そこには、なんと女のとくに仲の良かった、美穂と、大桑朋美、山部小百合が居たのだ。

それを見た途端、なぜか口元がにやけている自分がいた。

別に、何か可笑しかった訳ではないけれど、ただ単純に、嬉しさという感情が、腹の底から込み上げていたのだ。人間、嬉しすぎると変な行動を起こすことがたまにあると言う。

俺は嬉しかった。

またあの3人と一緒に行動することができることが何より。

その日の帰り、部活を休部している俺は、哲平より一足先に帰路に着いた。

最寄りのバス停までやって来ると、すでに同じ制服の学生達が列を作っていた。

その中に、数人で話をしている学生達の間挟まれて、居辛そうにしている1人の女の子がいた。

「あ……。」

ちらりとその女の子が近くの公共時計を見上げた瞬間、はっとする。そのときに見えた横顔は、河上美穂、その人だったのだ。

「河上さん！」

席替えの後、すっかり打ち解けた美穂に対し、ますます複雑な気持ちが募る中、俺は彼女を見掛けて声をかけずにはいられなかった。

「み、溝内君。」

俺に気が付いた美穂は、相変わらず驚きと恥ずかしさの入り混じったような表情をした。いくら以前に比べて打ち解けたとは言え、普段はほとんど男子と接触の無い美穂にとって、やっぱりまだ慣れない部分も多いのだろう。困ったときにする、手の平で顔を覆うように隠すしぐさを見て、ほんの少し淋しい気持ちになった。でも、そんな俺の気持ちとは裏腹に、美穂は照れ臭そうに、すっと列を抜け出すと、列の最後尾に並び俺のすぐ後ろに並び直した。

「よかった、1人じゃ居辛かったの。」

美穂は家庭科部員だが、週2回の活動日以外は帰宅組だった。

「溝内君、今日部活は？」

自分からこんなに話してくれることは、男になってから初めてのことであった。

「ああ、俺今休部中なんだ。」

無理して話しているのだろうか、顔が少し赤い。それに知られて、俺もなんだか照れ臭くなる。

「休部？どうして？」

決して口数は多くないが、美穂はいつも鋭い所を突いてくる。

「えーっと、たまには休憩しようと思って。」

あんまり記憶喪失だとか何とか言って、美穂にいらぬ心配を掛けさせるのもどうかと思って、とっさにこんなことを言ってしまった。

美穂は、底抜けの心配性なのだ。

「そつか・・・。溝内君でも休憩したいときつてあるんだね。私もときどきそうだが　　ら・・・。」

そう言ってふっと溢した彼女の笑みになぜかドキリとした。

その瞬間、自分の顔が火照っていることに気が付いた。

この感じ、前にもなったことある・・・。

ドキドキして、顔が火照るこの感覚、これは以前にも同じような経験があった。でも、いつのことだか思い出せない。

そのとき、美穂が鞆に付けていたキーホルダーをぽとりと落とした。それを拾おうと俺が屈み込む。

あ・・・。リ्यूチだ・・・。

ふと昔の、同じような場面を思い出した。

理沙だったとき、リ्यूチが寝ぼけて机から落とした筆箱を拾ってあげた出来事だった。

そのときの心臓のバクバクと、顔の火照りときたら、本当にとてつもないものだった。

でも、たった今、美穂のすぐ横で、これとよく似た感覚に陥っている俺がいる。

も、もしかして俺・・・美穂のこと・・・！？

そして、皮肉にもとうとう俺は自分の気持ちに気付いてしまったの

だ。もう後戻りはできない、どうしようもない気持ちに。

「修学旅行、楽しみだね。」

そう言った美穂の言葉に、俺は必要以上にドキマギしていた。

真実

日曜日の午前中、ニューヨークのリ्यूチから手紙が届いた。

彼は筆不精であつたから、この一通を書くのにきつと何枚もの便箋を無駄にしたのかもしれない。机に向かいながら、むしゃくしゃしつつ何度も紙を丸めているリ्यूチの姿が目には浮かぶようだ。それ程までに、この手紙は貴重な一品で、俺は密かに生涯これを額縁にでも入れて保存しておこう、なんて考えながら、封を切った。

『航紀、連絡が遅くなつて悪かつた。哲平は勝手にニューヨークに来てしまったことに

怒つて拗ねてるんじゃないか？

だとしたら、また迷惑を掛けるな……。』

（まあな、ちよいと一揉めあつただけだ。ま、これはリ्यूチには黙つとくか。）

手紙の内容に、思わず１人心の中でツツコミを入れてしまう。

『お前のことだから、色々心配してるのだと思う。

だから、報告だけはしておくことにする。

でも、この手紙を読んで、余計に心配するようなことはしないであれ。』

さすがにリ्यूチ、俺のことをよく分かっている。

俺が心配症で、毎日学校帰りに重家自宅に寄ってから帰っているな

んてことも、ひょっとしたら予想しているのかもしれない。だとすれば、それは見事な大当たりである。そういった行動の理由は、なんとかリ्यूチの近況報告が自宅に入っていないだろうかと考えた結果からのものだった。

御蔭で、おばさんとは以前にも増して半友情とも言え、半親子愛にも似た奇妙な関係を育むことができた。できれば、連日連夜心配で睡眠のとれていないおばさんのことを、せめて俺や哲平と同じくらい気遣ってあげて欲しいものだ。

『あんまりいい報告ではないが、まだまともにケイトと話せていない。

というよりも、話してもらえていないと言った方がいいかもしれない。

『けど、必ず何とかして、けじめはつけるつもりだ。』

この手紙を書いているときのリ्यूチの気持ちは、きっと孤独と不安でいっぱいだっただろう。俺がこの立場なら、きっと耐えられなくなつて、哲平やリ्यूチの待つ日本にすぐさま帰ってきてしまっていると思う。誰も頼る者のいない地に独りで暮らすことの辛さを、俺はまだ予想もできていない。

『当分、また連絡しないと思うけれど、心配しないように。

最後に、哲平の住所を覚えていなかったせいであいつに手紙を出せない。だから、ぜひ伝えておいて欲しい。』

2行空いたその次の行を読んで、思わずはっとする。

『ニューヨークの空は日本の空と繋がっている。

だから、空を見上げるとお前らの元気が降ってくる。

今の俺はそれに支えられている。

ありがとう。』

決して弱音を吐くことのなかったリューチの、自らの弱い部分を曝け出した最初で最後の出来事だった。考えていた以上に、ニューヨークでの生活は、リューチを精神的に痛めつけているようだ。ただ、いつも俺たちの兄貴的存在の彼が、俺と哲平がその存在を必要としているのと同じように、俺達のことを必要としてくれていることに、心底嬉しく思うと同時に、胸が苦しくなった。

「航紀、ちょっと来てごらん！すっごい懐かしいもの出てきたわよ。」

母親が階段の下で呼ぶ声がする。

「ねーえ、こーうーきー！」

手紙を読んでしんみりきていた時だったから、この場違いなふざけた母親の声に苛立ってしまう。

「ああ、もう！わかったから、すぐ行くって！」

面倒臭い気持ちに80パーセントを占め、今、自分のコピーロボットがあれば、迷わずそれに行かせるのに。などと空想を膨らませる。

仕方がないので、よっこらせと重たい腰を上げ、母親の呼ぶ下の部屋に向かった。

「もう、何？」

これ以上ないという程のスロースピードで階段を降りて、部屋に入ると、目を覆いたくなるまでに散らかっていた。いつもはきっちり

と真ん中に置かれたテーブルが、すっかり部屋の隅に追いやられ、フローリングに敷かれたカーペットの上に、無理矢理にこじ開いたと思われる、空のダンボール箱が数箱と、残りのスペースを覆い隠すように散乱したアルバムの真ん中で、うつ伏せに肘をついた形で寝っ転ぶ母親の姿があった。彼女はどうかやらアルバムを見ているようだ。

ユニクロのスポーツパンツに、結婚当初に買ったと思われる伸びきったトレーナーを着ているその姿は、どこかの誰かに似ているような気がする。

はて、あれは一体誰だっけか。

「見て、写真整理しようとしたらね、すごく懐かしいアルバムが出てきたの。」

母親が見ているアルバムを指さすので、屈みこんで見ると、3歳位の男の子の写真がきれいに並んでいた。

「なに、これ？」

もう少しじっくり見ようと、母親と同じ姿勢になってアルバムを覗き込む。

「これ、あんたよ。こんな時期あったのねえ、今じゃこんなに大きいけど。」

これが俺！？

写真の男の子は、ウルトラマンのTシャツを着て、父親に肩車してもらっている。その次のページは両親に遊園地に連れて行ってもらった時の写真のようだ。

「へえ・・・、俺ってこんなだったのか・・・。うわ、このとき母さん若！」

こんな風に近くで2人して話をするのは、思えば本当に久しぶりのことだった。

女ときは、よく2人で買い物に行ったりしたものだ。そんなことを思い出すと、なんだか少し淋しい気持ちになり、懐かしい気持ちになった。

「ね、すごいでしょ。じゃあさ、これも見てごらん。」

母親が手に取ったアルバムは、今度は表紙が変色して黄色くなっているものだった。

表紙をめくると、まだ生まれて間もない赤ん坊の入浴写真が何枚も納められている。

顔も猿みたいに真っ赤で、決して可愛らしいとは言いがたいものだったが、それは確かに男の赤ん坊だった。

「これも航紀よ。生まれたときはこんなに小さかったんだから。」

母親が静かな口調で話し始める。

「航紀が生まれる前、お母さんは風邪を拗らせて熱を出してしまってたね、お医者さんに、もしかするとあなたに後遺症が残るかもしれない、って言われたことがあったの。そのとき、心配で心配で、毎日泣いて過ごしたのよ。けど、生まれたあなたは、後遺症もなく、元気な赤ちゃんで、今でも本当によかったってときどき思うのよ。」

何かずしつと重いものが胸にぶち当たった気がした。

自分を生むのに、母親はどれだけ大変な思いをしてきたのだろうか。心も体も痛めながらも、懸命に俺の幸せと健康を願い続け、やっとのことでこの世に産み落としてくれたのだ。彼女の苦勞は計り知れない。

こんな大切な命なのに、俺は間違って生まれてきたなんて・

。。

「そんなに辛い思いをしたのに、途中で子供を産むのが嫌になったりしなかったの・・・？」

やつとのことで俺は母親に疑問をぶつけることができた。

「あなたがお腹の中にいるってわかった瞬間から、生まれるまでの10ヶ月間、一度だってそんなことは思わかったわ。あなたが少しずつお腹の中で育っていくことが毎日の喜びだったし、早く会いたいとばかり願っていたもんよ。」

母親は、にっこりと笑いながらパタリとアルバムを閉じた。

―と、その瞬間、再び自分の中で何か引っかけた。

以前哲平とリユーチが家に泊まりに来た日に感じた引っかけかきと同じものだった。

「10ヶ月・・・。」

思わず口から言葉が漏れる。

「10ヶ月がどうかした？」

不審そうに母親が見つめる。

そして記憶の片隅から、ある記憶が甦ってきた。

中学のときに習った保健の授業の内容である。

そこでは確か、生命の誕生について勉強したように思う。

そのときも、あのゴリラのような体育教師も、妊娠から出産までの期間は10ヶ月だと言っていた覚えがある。

「いや、なんでもない・・・。」

慌てて口を噤むと、はっとした。

やっぱり、何か引つかかると思った・・・！！！！
早くリ्यूチに連絡しないと。

こうして俺は、ふとしたことから、とんでもない事実を知ってしまったのである。

手紙

リユーチがアレックスに家を追い出されてからというもの、ほぼ毎日のように近くの公園の辺りまではやってくるのだが、あの日のケイトの辛そうな姿を思い出すと、なぜだかチャイムを鳴らしてもう一度訪ねることが出来ないでいた。

「おい、アレックス。またあいつ来てるぞ。」

あの日以来、毎日のように、家の前をうろついている人間がいれば、誰だって怪しむものだ。

「ああ……。放っておけよ。すぐ帰るだろ。」

そんなリユーチの様子にアレックス自身も気付かないはずはなかった。

以前はあんなに仲のよかった幼馴染みだったのだ、彼の行動が気にならないはずはない。

リユーチのやつ、まだ日本に帰ってなかったのか……。

アレックスはなるべくリユーチに気付かない振りをし続けた。しかしそれは、とても心の痛む行為だった。

ある祝日の午前中、アレックスはバイクの改造用の部品を揃える為、買い物に出掛けていた。帰りがけに、ちょうど朝ごはんを抜いたせいもあって腹が減ってきたので、人気のカフェに立ち寄ったのだった。しかし、そこで思わぬ人と出会うことになる。

「よお。」

卵を載せたトーストを頬張りかけたアレックスの背後から、聞き覚

えのある声がした。

ゆっくりと顔を向けると、思わずトーストを皿に戻す。

「・・・リ्यूイチ・・・」

そこには、こないだとは打って変わって、真紅の髪をストレートに落としたままのリ्यूチの姿があった。見たところ、髪はまだ濡れているようだ。どうやらシャワーを浴びた後らしい。

服装も、ジーンズにTシャツとシンプルなものだ。

「ここ、いいか？」

リ्यूチはアレックスの正面の空いた椅子を指さした。

「あ、ああ・・・」

つい伏し目がちに返事をするアレックス。彼自身、思いも寄らないところでとんでもない人間と居合わせてしまった不幸を恨んでしまっていた。

静かに椅子を引いて腰を下ろしたリ्यूチは、この前よりも少し痩せて見えた。

「こないだは急に押しかけて悪かったな。ケイト、今は落ち着いてるか？」

数年前よりずいぶん大人びたと感じたリ्यूチの雰囲気は、やはり間違いはなく、近くで見ると一層物静かで独特のオーラを放っていた。

「あ、ああ。今は落ち着いてるよ。」

アレックスはこの間の、強引な追い返し方をしたことを、少なからず悪いと思っていた。

その為か、さつきまであんなにあった食欲も一気に失せ、今はなんとかしてこの場を離れたいと願うばかりだった。

「悪いな、いきなり話しかけて。気にせず食っていいぞ。」

そう言いつつリ्यूチは、カプチーノの紙コップを啜る。

仕方なく食べ始めたアレックスに、構わずリ्यूチが話し掛けた。

「偶然だな。俺の今いるアパートがすぐそこだから、午前中はよくここで時間を潰してるんだ。」

確かにそれは本当らしく、まだ濡れた髪がそれを物語っている。

「・・・リユーイチ、なんか話があるんだろ？」

アレックスが堪らずに切り出した。

「いや。ただ、この前はお前とゆっくり話できなかったからちよつと話したかっただけだよ。」

迷惑なら席移るけど？」

余裕を持った笑みからは、嘘をついているようには見えない。

「いいよ、そこに居ろよ。」

あまり関わりたくないと考えていたアレックスだったが、やはり心の底ではリユーチとの接点を失いたくはないという気持ちも少しはあるようで、ぶつきら棒に言い放つ。

「ズズズ・・・」

リユーチの全く気にもしていないようなカプチーノを啜る音が沈黙の中響く。

「アレックス、何買ってきたんだ？」

アレックスの隣にどっさりと置かれている紙袋をのこを言っているようだ。

「バイクの部品だよ。改造用。」

すっかりぬるくなったパンをかじりながらリユーチを見ると、驚くべきことに、なんと気さくに笑っていることか。

「なに、お前。またなんか悪いことしてんの？」

まるで数年間のブランクが無かったかのように、2人の時間は引き戻されたような気になった。

「リユーイチに言われたかねえよ、その頭。」

顎でしゃくると、2人はぶつと吹き出した。

「変わらねえな・・・。」

懐かしさを噛み締めるように、アレックスが呟く。

「あのとき、こんなことになってなかったら、俺達は今もロスでこ

うしてたんだろ？な。」

リユーチが遠い目をして言った。

「あれは、リユーイチのせいじゃねえよ……。」

アレックスがぼそりと言った。

「いや、俺のせいだ。だから、何があっても俺は責任をとらなきゃならない。たとえ、それがケイトやお前を苦しめることになったとしても……。」

アレックスの目を真っ直ぐ見て話すその姿は、強い決心を表していた。

そして、初めてアレックスは、リユーチの強い思いを知ったのだった。

「……リユーイチ、頼む。もう俺達に構わないでくれ。」

リユーチの気持ちを察したせいで、この前よりももっと胸が苦しくて、吐き出しそうになった。

「もう一度、最後にもう一度だけケイトと話をさせてもらえないか……？」

そのセリフを聞き終わらないうちに、アレックスは大きく首を横に振った。

「この前のケイトの様子を見ただろ？ケイトはお前を見ただけでも通常じゃなくなっちゃった。」

本当に彼女を思うなら、黙ってそっとしておいてやってくれねえか？」

リユーチは少し考え込むような形で肘をついて俯く。

「過去と言えども、一度はケイトを好きだったんだろ？二度までも彼女を苦しめるようなことはしないでやってくれ。それがケイトの一番の幸せなんだよ。分かるだろ……？」

訴えかけるようなアレックスの頼み。

リユーチは言葉を失った。

良かれと思ってここまで来たけど、

これは単にケイトを苦しめることになっちまったって訳か・

・・。

ふっと諦めたような笑いをすると、リユーチは情けない気持ちでいっぱいになった。

強い決心を胸に日本を飛び出してきた頃が懐かしく、何もできなかった自分への腹立たしさでいっぱいだった。まるで体から全部の力が抜けたようだった。

「・・・わかった・・・、もうケイトには会わねえよ・・・。」
そう呟いた力無いリユーチの声を聞いて、アレックスは心に銃撃を受けたような衝撃に駆られた。自分がこの男を生き地獄へと陥れたことに気が付いたのだ。

苦しさで、知っていることを全て話してしまいたかった。

しかし、喉まで出てきているその言葉を出す勇気を彼は持っていなかった。

思い切り叫んでやりたかった。

「その代わり、これだけは教えてくれないか・・・？」

リユーチはしっかりとアレックスの目を見据えている。

「アレックス、何か隠してないか・・・？」

時が止まったように、心臓の音が高く鳴り響く。

『ドキン、ドキン、ドキン・・・。』

ま、まさか、リユーチ、お前気付いてたのか・・・！？

「な、なんでだ・・・？」

必死で平静を保ちながら答えるアレックスだが、声は今にも裏返りそうになる。

「ケイトかマイク、病氣じゃないのか？」

心の中でアレックスのほつとした気持ちで満たされる。

よかった、まだ気付かれていない・・・という気持ちに。

リ्यूチの目は真剣だった。

「なんで毎日病院に通ってるんだ？悪いとは思ってたんだが、ちらつと噂で耳にしたんだ。」

しかし、安心はできそうにも無かった。既に、病院に通っているということ気付かれてしまっていることは、危険な証拠である。

「あ、ああ・・・。マイクが喘息持ちなんだよ。」

さすがにもうリ्यूチと目を合わすことはできなかった。もう、アレックスは自分自身を欺くことにも限界が近付いていた。

「やっぱりそうか・・・。」

リ्यूチは静かに席を立った。

「アレックス、悪かったな邪魔して。んじゃ、俺もう行くわ。元気でな。」

店を出て行くリ्यूチの後姿を見ながら、アレックスは金縛りにあったように、動けなかった。呼び止めることさえできなかったのだ。ただ、リ्यूチがこのまま日本にも帰らず、どこかに旅立ってしまったのではないかと感じていた。彼は、そういう人間だった。

俺はきつと、一生今を後悔して生きることになるだろうな・

・・。

最大の親友を失ったこの日を・・・。

リ्यूチがアパートに戻ると、ボロボロになって、色の剥げた部屋のドアの下に、何やら挟まっていた。

ゆっくりと引つ張り出してみると、一通の手紙だった。

裏返して送り主を見ると、

” K o u k i M i z o u c h i ” という文字が書かれていた。

希望を全て失い、支えてくれていた航紀や哲平との約束も果たせなかった今、合わせる顔がなかった。そして、もう二度と日本の地を踏まないことを決意した矢先のことだった。

しかし、純粹に手紙を見て嬉しさが込み上げて来た。

日本の空とニューヨークの空は、確かに繋がっている。

とりあえず鍵を開けて部屋に入ると、へばり込むようにして汚れた床に腰を下ろして、最後の連絡となるかもしれないその手紙の封を切った。

『この手紙が一日でも早くリ्यूチの元に届くことを願っています。』

手紙の出だしはなぜだか少し焦った様子が窺え、字も多少乱れている。

不審に思い次の行に読み進めると、次の瞬間、手紙を持つ手が震えた。

『リ्यूチ、大変な事実が発覚したよ！』

ケイトの子はリユーチの子じゃない。

リユーチは確か、その子が4歳だって言ってたけど、それじゃ計算が合わないことがわかった。

通常、妊娠から出産までは10ヶ月かかるそうだけど、リユーチが問題を起こしたのは4年前だったよね？

だとすると、そこから10ヶ月後にその子が生まれたと

すれば、今はまだ3歳のはず。

だから、リユーチの子じゃないはずだよ！

今すぐ確認してみて。

最後に、もっと早くにこのことに気付いてあげられなくてごめん……。

航紀

『

帰国

「よし、忘れ物ないわね？バス出しますよー！」

担任の杉田がバスの、音の割れたマイクで叫んでいる。

既にバス内は生徒達が騒ぎ回っていて、杉田の声は虚しくも掻き消されてしまった。

とうとう、リ्यूチは修学旅行に間に合わなかった。

ゆつくりと動き出したバスの中、たった2人だけが沈んだ気持ちでいた。

「リ्यूチ、結局帰って来なかったね・・・。」

哲平が狭苦しい椅子の上で無理に体育座りをしながらぼつりと言った。

俺の書いた手紙が、ちゃんとリ्यूチに届いたのだろうか、ちゃんと読んでくれたのだろうか。そんな心配ばかりが頭を過ぎて、素直に3泊4日間、大阪・京都の旅を楽しむ気にはなれない。

「哲平、リ्यूチちゃんと手紙読んだかな？」

こればかりはなんとも返事しようがないのか、哲平は口を尖がらせてたま何も言わない。

しかし、俺達は、先週の日曜日に、リ्यूチが子持ちじゃなかったことを知った直後、とてつもない安心感に見舞われたのだった。

「けど、すつごくショックだね、実咲は北海道に行きたかったんだけどな。」

なぜか違うクラスのはずの実咲が、俺と通路を挟んですぐ隣に座っていた。

今回、急遽旅行先が予算の関係で北海道から大阪・京都に変更になったのだった。

でも、毎度のことだが、俺にはそんなことはどうでもいいことだった。

それよりも、リ्यूチがいないことと、苦手な実咲がすぐ隣に居ることが気がかりで仕方がなかった。

「それにしても、重家くんが来ないなんてびっくりだね。航紀くんどうしてか知ってる？」

何も知らないとは言え、無神経なことを訊く実咲に腹を立てたのか、哲平がわざとらしく溜息を漏らした。

「さあ。」

俺は、これ以上の余計な詮索を避ける為、目を閉じて眠ることにした。

眠っている間は何も気にしないで済むと考えたのだ。

「空港に着きましたよー、バスの中に忘れ物がないようにしてくださいね。」

杉田の声と、首の痛みで目が覚める。近頃あまりしつかり睡眠を摂っていなかったせい、久しぶりによく眠った気がした。

哲平も眠っていたのだろう、まだ目が半分程閉じたまんまだ。

バスから荷物を降ろし、空港内に向かう途中も、同じ班に美穂がいるにも関わらず、ぼうつとしたまんまで、未だしつこく付きまとう実咲にもほとんど返事をしていない程だった。

まるで、心はまだ家に置いてきたかのように・・・。

そんな時、どよつと生徒集団からどよめきが起った。

皆、同じ方向を見つめている。

抜け殻になった体でぼうつとその先を見る。

と、瞬時に俺と哲平は現実へと引き戻された。

「リユ、リ्यूチ！！??？」

なぜか、あの懐かしいリ्यूチの姿がそこにあったのだ。

皆もびつくりした様子でひそひそと話をしている。

「よお。」

海外から帰ったばかりのようなスタイルで、こじんまりとしたスーツケースを引きずりながら、リユーチがこちらへ向かってきた。

「な、なんでここにいの・・・??？」

哲平が状況を飲み込めない様子で口をパクパクさせている。

「おつ、哲平！相変わらずだね、いい子にちてまちたか？」

一ヶ月ぶりの再会で、相当哲平に会えたことが嬉しかったのか、リユーチは哲平の頭をくしゃくしゃと撫で付けた。

「あつ、ちくしょ！またガキ扱いしやがって」。リユーチ、元気だった??」

潤んだ哲平の目は、生き別れた兄との再会をも思わせた。

「おお、この通りぴんぴんしてるぜ。航紀、色々心配掛けたな・・・」

「くるりと向き直ったリユーチの顔は、一ヶ月前より少し痩せていた。ニューヨークでの苦労がひしひしと伝わってきて、喉の辺りがツンとした。」

「あ、ああ・・・。よかった・・・、帰ってきたんだ・・・。」

気が付くと思とは反対に、生徒達が見守る中、俺はリユーチにうな垂れた頭をもたれ掛からせてしまっていた。

わずかだが、リユーチの服からはニューヨークの香りがするように感じた。

驚くような偶然により、急遽修学旅行に参加することになったリユーチと、飛行機の出発時間までの間に話をする事ができた。

「帰国便がちょうどさつき到着したばかりで、まさかお前らと成田で会えるとは思ってなかったぜ。」

そう言つて、リユーチはニューヨークであつた出来事を事細かに話し始めた。

航紀からの手紙を読んだ直後、俺はすぐさまぼろアパートを飛び出し、ケイトの自宅へと向かった。近くの映画館でのチケット販売でバイトをしてなんとかやっていた俺には、すでにタクシーに乗る贅沢はできなかった。その為、小走りで向かうはめになった。

俺がケイトの家の前までやって来ると、アレックスがさっそく車のない車庫を開け放して、バイクの改造を始めていた。周囲には色々な部品が散乱している。

そこに、先程後ろ髪を引かれる思いで別れたはずの俺が、息急き切って現れたのを見て、アレックスは目を丸くした。

「リユ、リユーチ・・・!？」

あんなに断っておいたのに、なぜまた現れたのかという表情が見て取れた。

「アレックス、ケイトは？中か？」

ずかずかと家に入って行こうとする俺の腕を、アレックスは既に油で黒く汚れた手で強く引つ掴んだ。強い痛みが走る。

「どういっつもりだ、リユーチ！？ケイトには会わねえって約束したじゃねえか！」

ここまでケイトに会わせたがらないアレックスのこの必死さに、どうも不信感を抱き、その掴まれた手をもう片方の手で剥がし取った。「そういう訳にはいかなかったんだよ。」

今思うと、アレックスの今までの行動にはおかしな点がいくつもあった。彼は、真実を知っているはずだ。

『ブロロロ・・・』

車のエンジン音に、アレックスがビクリと反応する。

ケイトの紺の乗用車がすぐ角を曲がってこちらに帰ってきたのだ。よく見ると、助手席には、マイクも乗っている。

「今日は祝日なのに病院へ行ってたのか？」

鎌を掛けたつもりだったが、思いの他、アレックスはだらりとうな垂れたまま何も言わない。

「何とか言えよ、テメエ。」

熱いものが胸を駆け抜け、それと同時に俺はアレックスの胸倉を掴み掛かっていた。

「やめて！！リユーイチ、何してるの！？」

車を降りてきたケイトが、急いで割って入ろうとする。

マイクはきよとした顔でまだ車の中だ。

「・・・・・・。」

子どもの見ている前だということに気が付き、とりあえず俺は掴んだ手をゆつくりと離れた。

アレックスも目線を落としたまま何も言おうとしない。

「ねえ、一体何があったの？」

こんなことになったのも、ケイトのことが原因だと、彼女は気付いていなかった。

「・・・・ケイト、マイクは俺の子じゃないんだろ・・・・・・？」

一瞬時が止まったように感じた。

見ると、ケイトの唇がこの前と動揺に、ワナワナと震えている。顔色も真っ青だ。

「な、何言ってるの・・・・？間違いなくあなたの子よ・・・・？」

そんなケイトの様子を見て、俺は確信した。

マイクは俺の子ではないことを。

「俺の子じゃない。俺の子なら、まだ3歳のはずだ。」

ふるふると首を大きく横に振って一生懸命否定しようとするケイトの肩に、アレックスの大きな手が添えられた。

「ケイト、もう隠すのは無理だよ。リユーイチは知ってしまったん

だよ。

正直に話すときがきたんだ。」

震えるケイトの体を支えるようにして、アレックスは話始めた。

「リユーイチの言う通り、マイクはお前の子じゃない。ニシジマハルヒコって男との間にできた子どもだ。」

瞬間、俺は大きな脱力感を味わった。それは、怒りと言うよりも、長き間の苦しみから解放されたことによるものだった。

「ニシジマ・・・ハルヒコ・・・？」

聞き覚えの無い名前、俺がこの人物に会ったことがないのは確かだ。「ニシジマは、5年前に訳ありで日本からロスに移り住んできた男で、ケイトと出会うまでにはそう時間はかからなかった。ケイトとニシジマは婚約もしていたし、俺の目から見ても幸せそのものだった。でも・・・。」

アレックスが表情を曇らせた。ケイトはとうとうその場にへたり込んでしまう。

「ア、アレックス、いいわ、私が話す。」

震えた声でケイトがゆっくりと話し始めた。

「私とハルヒコの婚約が決まったその日の晩、ハルヒコが自宅に帰る途中に事故に遭ったのよ。意識不明の重体だった・・・。一命は取り留めたものの、彼の意識は戻ることはなく、機械で生かされている状態になってしまった・・・。」

いきなりの告白に、俺は頭が真っ白になっていた。

「彼が事故に遭ってしばらくして、私は彼の子どもを妊娠していることに気付いた。」

絶対にこの子の父親を死なせまいと色々と考えたわ。そんな時、リユーイチ、あなたの顔が浮かんだの・・・。」

婚約の・・・？

マイクはニシジマの子ども・・・？

事故での重体……？

俺の頭は混乱し、整理のつかない状態に陥っていた。
それでもケイトは震える声で話し続けた。

「ハルヒコの命を留めておくには、莫大なお金が必要だったのよ。
けど、身寄りのない彼にはそんなお金を出してくれる相手もいなかったし、もちろん保険なんか掛けていなかった。かと言って、ただの教師である私にも用意できるはずの金額でもなかった……。そんなお金を持つているのは、知り合いの中であなたのお父さんしか見当たらなかったのよ……。」
アレックスは辛い表情で頭を抱え込んだ。

「そして、この計画を実行する引き金になったのは、リ्यूイチ、あなたの血液型だった。
同じ日本人で、ハルヒコと同じB型。もう、あなたを利用するしか方法が無かったの。」

そうか、俺は利用されていたのか……。

「リ्यूイチ、そして俺もケイトを手伝った。親友のお前を裏切つて、ケイトの計画を手伝ったんだ、俺は。お前がケイトに好意を抱いていることを知って、それを上手く計画に使ったのは馬鹿な俺なんだ……。」

全てを白状したケイトを庇うように、アレックスが言葉を付け足した。

「いいえ、私が全て仕組んだことよ。私は、愛する夫と子どもを守

ることと引き換えに、当時まだ13歳だったあなたの人生を犠牲にした。何もかも私の罪なの……！

許してちょうだい……。他に方法が無かったの……。」「

溢れ出す涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、ケイトは俺の足にすがり付いて泣いた。

「違う！共犯の俺も同じ罪だ……。！リユーイチ、ケイトを許してやってくれ……。」「

今まで涙を流すことのなかったアレックスの目から、初めて涙が溢れた。

それは、親友を裏切ってまで、純粹に姉を助けてやりたいと願いつけた従順な弟としての涙だった。

そして俺は、そんな2人を見つめながら、あれからの4年間をゆっくりと思い出していた。

ピアノを捨て、

バスケも捨て、

煙草に手を出し、

女遊び、

親父の金をばら撒く日々……

俺の心の中には常に闇が存在し、俺は見事に落ちぶれ、無駄な時間を過ごしていた。

しかし、そんな日々の中にも、俺にとってかけがえの無い出会いがあった。

哲平と航紀に出会えたことは、何よりの救いであり、唯一誇れるものだ。

生きる希望も、人を信じる気持ちも、温かさも、2人から徐々に取り戻させてもらった。

「俺は、ケイトとアレックスのしたことを許すことはできない。」「

俺ははつきりと2人に言い放った。

「・・・お、お願い・・・、訴えるだなんてやめて・・・!どうにかしてお金は少しずつ返済するから・・・、だから・・・。」

ケイトの、足にすがりつく手が一層強くなった。その目線の先は、ここからは死角になって見えないが、マイクの乗った車に向けられているようだ。

「リユーイチ、お前のしてきた苦労は償っても償いきれないことは分かっている。けど、訴えることだけは勘弁してくれないか?マイクはケイトがいないと駄目なんだ・・・!」

その声からは、ひたすらの必死さが伝わってくる。

「・・・ただ、2人には感謝しなきゃならないこともある。

日本での生活を余儀なくされたお蔭で、俺は最大の友人達に出会うことができた・・・。」

少し考えた結果、俺が決めたことはこうだった。

「だから、2人を訴えもしないし、このことは生涯親父にもお袋にも言わねえ。」

ケイトとアレックスは驚いたように目を丸くして俺を見た。

「ど、どうして・・・? 私たち、あなたにあんなにひどいことしてきたのよ・・・?」

俺は車庫の中から見える空を見上げた。まだ昼過ぎで、日は高いが、気持ちのいい天気だった。

「確かに俺はこの4年間、辛い思いをしてきた。けど、この辛さ無しでは今の俺は無かった。

俺が親父に言わないことで、ケイトは今まで通り、ニシジマの医療費を受け取ることができるし、問題ないんじゃないか?」

ニューヨークの空は日本の空と繋がっている・・・、か。

とんだ運命もあつたもんだ……。

不思議と俺には怒りという感情は湧いてこなかった。代わりに、4年ぶりに穏やかさを取り戻したような気がした。

「リユーイチ、本当に……本当にごめんなさい……。」

ありがとう……！！！！」

泣き崩れたケイトの側にアレックスが駆け寄り、何度も俺の手を握り締めた。

日本に……、日本に帰るか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177a/>

c hose of life

2010年10月10日14時16分発行